

私たちに優しい世界へ

桔梗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤龍帝を宿す青年、兵藤一誠。

彼には姉がいて、親友は美少女!?

そんな感じの、原作とは少し違う彼らのお話です。

目次

第1話	平穏な毎日	1
第2話	暖かい昼休み	13
第3話	加わる日課	20
第4話	フェニックスのトラウマ	30
第5話	聖剣騒動勃発	39
第6話	幼馴染	46
第7話	教会からの使者	54
第8話	戯れ	63
第9話	契約	71
第10話	笑み	78
第11話	いざ決戦の地へ	93

第12話	戦闘開始	104
第13話	意思と力と…?	115

第1話 平穏な毎日

昔、まだ小学生にも上がらない頃の話。

本来なら一人の少年がとある紙芝居屋に出会い、とある性癖を獲得する…はず、だった。

「ねえちゃん、かみしばいだって!」

「もうイツセー? イリナちゃんと約束してるでしょ?」

「あ、そうだった!」

「ほら、わかったんなら行くよ」

ギユツと手を繋ぎ、双子の姉に引かれてその場を立ち去る少年。

仲の良い姉弟はその後もずっと仲良く過ごした。

小学校も中学校も…様々な出会いと、別れを一緒に体験した。

そして——色々な不思議をも一緒に体験し、二人は高校生になった。

○

ジリリリー—煩いアラーム音が響く。

叩くように止めて、ここ数日でようやく着慣れてきた高校の制服を着る。

「ふあああ…まだねみい」

『やれやれ、大丈夫か一誠?』

「だいじよばねえ…ねてえ」

声に応える彼の部屋には、他に人影はいない。

それもそのはず、その声は彼の中から響いていたからだ。

目を覚ますついでに、立ったまま目を瞑り神経を研ぎ澄ませる。

ゆつくり水に沈みこむように、精神を内側へと集中させる。

「…はよ、ドライグ」

「ああ、おはよう…挨拶してる場合か?」

「いいんだよ、ドーセ姉ちゃんはまだ寝てんだろ?」

「相変わらず姉中心だなお前は」

「るせー」

呆れたような言葉を漏らすのは、彼の中…精神世界と呼べるその場所にいる存在、赤き龍の帝王と呼ばれる強大なる者…ドラゴン。

初めて出会った、というよりも自覚したのは数年前のこと。

とある出来事により、一誠は神セイクリッド、器ギアという物が自分に宿っていることを知った。

その話をするると長くなるが、その時からドライグとはかなり濃い付き合いになる。

何せ自分が自覚していない間もずっと内側にいたのだ……好き嫌いに思考から性癖やら、大体把握されていた。一誠からするとドライグは自分に憑りついてる超強い龍！
くらいの認識しかないが、そんなの関係ないほどに仲を深めていた。

「さつて・起こきさないとな」

内側から現実世界へと意識を戻し、隣の部屋に向かった。

「おねーちゃんの部屋」と名札の掛けられた部屋を一度ノックする……が、反応はない。

「入るぞー」

もはや何時もの事なので返事は気にせず勝手にドアノブを回す。

部屋は簡素なもので、机やパソコン、ベッドに棚：それ以外は机の上に女性雑誌が数冊転がってるだけだ。

この雑誌も友達から借りただけだろう。我が姉ながらこの我欲の無さには恐れ入る。そう思いながらベッドに包まる姉を揺する。

「おーい、おつきろー」

「んー、あと5ぶんー」

「つて言つてると寝坊しちまうだろ。ほら起きろつて」

バサッと掛布団を剥ぎ取ると、桃色のパジャマを着た小動物がその身を丸めていた。

自分より頭一個分は低い身長、腰まで伸びた栗色の髪。胸は大きすぎず小さすぎずと
 いったほどだ：：プロポーシオン整ってる美少女だよなあ、と眼福しておく。

一誠自身自分が不細工だとは思っていないが、美少年だとも全く思っていない。

身体は諸事情あつて鍛えているし、それなりに外見は氣遣つているつもりだが、それ
 でもこの人が自分の姉だとは思えないほどの美少女っぷりだと思つている。

ドライグ曰く、外見ではなく内面で見れば十分似た者同士だとのことだが：：同じ
 翡翠色の瞳でなければ全くとつて姉弟、それも双子だなんて言いきる自信はなかった。

「んんー：おつはよ、イツセー♪」

「はいはい、おはよ」

どうやら夢見は良かったらしく、上機嫌に起きて一誠に抱き着く美少女こと兵藤真
 琴。

一誠がポンポンと頭を軽く撫で、着替えるように誘導する。

「機嫌イイね、良い夢でも見たの？」

「まあねー。久しぶりに昔の夢見たよ」

「へえ。どんな？」

「イリナちゃん達と遊ぶ昔の夢く楽しかった♪」

「そりゃよかつたね。じゃ、着替えたら飯食いに降りて来いよー」

「はーい」

とりとめのない会話。でも、それが凄く幸せなことなのだ、二人はよく知っている。この世界には当たり前前の悲劇が転がっている……そして、不思議なことも、転がっている。

「あ、おはようございます」

「おう、今日も早いな」

「いえ、これも従者の務めですから」

「アハハ・相変わらず硬いなあ」

一階の居間に降りると、蒼い長髪と金色ツリ目の少女が朝食の準備をしていた。

姉よりさらに小柄、小学生ほどの背丈の少女……名前をレイン・ヒョウドウという。

姉に負けず劣らずの美少女だが、彼女は人間ではない。

「ん？レイン、首元首元」

「え……あ」

フツと一瞬で肌色になったが、ついさつきまで蒼色だったそこを手で覆い、照れたように頬を染めた。

「すいません」

「良いって、まだその姿慣れてないんだろ？」

「でももう一年になりますし、気を緩めただけでこれでは、これから先が思いやられます……」

「気にすんなって。ほら、姉ちゃん降りて来る前に盛り付けちまおうぜ」

「は、」

外見的には外国人だが、作るのは純和食。

降りてきた姉と、匂いに釣られてきた両親も入れて、美味しい朝ご飯を食べる。

そして今日も今日とて駒王学園へと通う二人や、仕事に向かう親をレインは見送るのだった。

○

駒王学園。

今年から共学になったそこは、男子よりも女子の数が多いまさに花園。

期待してウキウキ気分で入学してくる男子生徒が多い中、兵藤一誠は冷静だった。

何故なら、彼がこの学園を選んだのは単純明快。近いからと姉が選んだ学校だからだ。

合格した時点で既に目的を達成しているため、彼は今日も今日とて平和を甘受する。

唯一残念な点と言えば、姉とは別クラスという事だろう。流星にこればかりは仕方ない。

「おはよ、兵藤君」

「おお、おはよ木場さん」

窓際の一誠の隣に座つたのは、金のショートヘアの美少女、木場優奈。

よく剣道場で木刀を振るって鍛錬している姿が目撃されているが、剣道部ではなくオカ研だという謎多き美少女だ。

「兵藤君、今日は暇かな？」

「あー、時間はあるけど。姉さんが部活終わるまでなら」

一誠も真琴も帰宅部だが、姉は色々な部活の助っ人に呼ばれることが多い。

あの外見と明るい性格によって人から好かれまくっている：言い方は悪いが、弊害というやつだ。

一誠もたまによばれるが、やはり女子が多いこの学園では男子より話しかけやすい女子である真琴の方が声がかかる。

「十分だよ。放課後、またよろしく！」

「あーはいはい」

まるで逢引のようだが、実際は全然違う。

——木場優奈は、戦闘狂の節がある。

「……一週間ほどで理解した彼女の一面だった。」

一度だけ、質の悪い不良に絡まれていたのを助けたことがきつかけだった。

—「ありがと。キミ、強いんだね」

あの時、一瞬感じた悪寒に従って無視できれば良かったのだが、いかんせん彼女は同じクラスメイトだった。

逃げ場なんてないも同じ。気づけば夕暮れの中木刀を向けられ、喧嘩沙汰に。

華奢な身体から考えられない踏み込み、年不相応の気の入った太刀筋……ギリギリ引き分け続けているが、彼女はまだ力を温存しているであろうことを理解している。

まあ、互いに殺傷沙汰にしないためにギリギリを見極めて戦りあっている、と言った方が正しいだろうか。

ともかく、木場優奈からすると兵藤一誠は丁度いい力の発散場所……もとい、対人練習相手となっていた。

「加減してくれよ？流石に骨折とか勘弁なんだ」

「そつちこそ、加減してよ。僕はか弱いんだからさ」

「なーに言ってるんだか」

「あ、酷いなー。いくらなんでも傷つくよ？」

皮肉なことにそんな経緯があつたからこそ、このクラスでは一番の仲良しとなつていた二人は先生が来るまで会話を続けた。

○ 放課後、剣戟なのか拳撃なのか分からない音が響く中、別の場所では真琴が走り回っていた。

「兵藤さん、次こつちお願い！」

「はい！ちよつと待って、まだ着替えが・」

「そのままでもいいから！早く早く！」

体育着からユニフォームに着替えようとしていた彼女をそのまま引つ張っていき、次は外へと向かう。

バスケ、テニス、野球、はてはアメフトやら空手の練習相手やらと引つ張りだこで活躍する真琴は、毎度のことながらてんやわんやと目を回していた。

疲れる……とはいっても、肉体的な意味ではない。

真琴はこのくらいじゃ疲れない、そういう身体をしている。だが、精神はそうはいかない。

状況がコロコロかわるのに適応して体を動かすのは、大変だった。

でも……。

「ありがと！助かったよ！」

「なんのなんの、アハハ」

こうやって喜ばれるとどうしようもなくなってしまう。まあこのくらいいいかなーなんて思ってしまうのだ。

この安請け合いを弟には心配されていたりするが、それはそれでありがたいし弟からの心配というのとはとても嬉しいため止める理由にはならないのだ。

「……？」

ふと、視線を感じて見上げる。

こちらを見下ろすのは、二年生の教室からのぞく赤と黒……リアス・グレモリー先輩と、姫島朱乃先輩だった。

お姉さまと下級生……果ては同級生や一部の3年生にすら親しまれている存在だ。

こういった視線は初めてではない。あの二人だけではなく、生徒会の支取蒼那先輩や真羅椿姫先輩からも視線をもらうことが多い。

まあ、弟の一誠も視線を浴びているのだが、彼自身そこら辺は敵意が入っていないと鈍いようで、気づいていない。

「兵藤さん？」

「ん？ ああごめんごめん、次は柔道部だっけ、レッツゴー！」

「え、わ速い速い待って!？」

理由は何となく察しているが、今の所関わる気はないし、理由もない。

平和で平穩で、ちよつと忙しくて騒がしい。そんな普通の学園生活を謳歌するのだつた。

帰つて家族とご飯を食べて、話をして、眠る。そしてまた起きる。

——ああ、素晴らしい。

今日も白い天井を見上げて眠つた。



目を開くと、視界が赤かつた。赤い中に、大事な弟がいた。

—姉ちゃん、姉ちゃん。

昔、もう過去の事だ。だからこそ、返事は出来ない。

—ごめん、おれ、俺：！

泣かないで。声は出ない。

—う、あ、あああ。

落ち込まないで。声は出ない。

—頼むよ、ドライグ……俺は、俺はっ!!!

別に気にすることは無いんだよ。声は、出ない。

「ガ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ああ、もう……ごめんね、ありがとう。!!!!!!

やっぱりそれも声に、言葉に出せなかった。

仕方ない。独りにしたくないし、させたくないし、なりたくなかったから。

何となく、でも自分の意思でアタシは……自分の中にあるパンドラの蓋を解き放つ
た。



あり得ない生まれが、出会いが、出来事が起こった世界。

少しだけ、でも確かに違う、そんな世界の物語。

果てに待つのは何なのか、誰も何も分からないまま彼らの物語が、一年の時を経て始
まった。

第2話 暖かい昼休み

晴れ渡った青い空、白い雲。

今昼寝が出来れば相当気持ちがいいだろうな、と確信できる穏やかな気温。

事実、きつと今頃ゆつくりうたた寝でもしている生徒がいることだろう、そんな昼休みのこと。

例にもれず兵藤一誠も、無断で立ち入った屋上にて惰眠を貪っていた。

そんな彼に、一つの影が近づいていく。ベンチで寝転がっている彼の顔を覗き込むように、その影——彼女は一誠に話しかけた。

「やつほー、なーにしてるの?」

「なー? 昼寝え」

「わー眠そう」

「事実眠いんだよ……てか何しに来たわけ、天野サン?」

棒読みでまるで興味ありませんと言外に尋ねる。

彼は寝に来ており、それ以上のことに今現在余力を使う気はなかった。全力で惰眠を貪る所存である。

そんな彼を見てちよつとイラツときたのか、一瞬眉を顰めたスレンダーな黒髪美少女・天野夕麻は彼の額まで手を持っていき……思いつきり凸ピンを放った。

「痛え!?! 何しやがる!?!」

「折角の昼休みに会いに来た女の子に対して、その態度はないでしょイツセーくん?」

「そもそもからして学園関係者じゃないだろアンタは。なあ、墮天使さん?」

「ちよ、学園で無警戒に言わないでくれる!?!」

凸ピンのお返しだ、と欠伸交じりに頭を搔きながら伸びをする。

彼女、天野夕麻は見かけ人間な上に駒王学園の制服を着てはいるものの、実際はぜんぶ裏工作の元に反則的手段で入学してきた墮天使である。

そしてこの学園を……というより、この街を管理しているのはとある悪魔たちだ。ばれたら多数の敵に囲まれるという状況なわけだが、彼女は普通に登校している。

「他の奴は?」

「そもそも入学してないわよ……ああ、でもアーシアは登校したがってたわね」

「そりやまた……」

アーシア・アルジェント。とある事情から協会に追放されたシスターだ。

何の因果か途方に暮れていたところに、丁度地上で活動しようとしていた天野夕麻と鉢合わせし、拾われた金髪薄幸美少女である。

とても良い子で丁寧な応対をしてくれる。事情を聞いてはいるが、正直何で協会はこの子を追放したのか全く理解できない。唯一残念なことは、日本語が喋れないし書けない、目下勉強中なこと。

「登校させてあげたいんだけど、さすがにあの子のフォローしてたら私のことまでばれちゃいそうだし」

「分かる。しかも彼女の事だから気にせず神器使うだろうしな」

彼女の神器、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑は人間、天使、堕天使、悪魔、全て関係なく治癒できる。そんな珍しい神器を、彼女は一目なんて気にせず使ってしまう……悪いことではないのだが、如何せん此処は悪魔が牛耳る学園。目を点けられるだろうし、そのフォローをして天野夕麻が堕天使だとばれた日には…。

「殺されるな」

「死ぬわね」

好き勝手に街の廃教会を使い、反則技で入学し、最近では神器欲しさに兵藤一誠を襲ったりして暴れてしまっている。そして暴れた件に関しては隠蔽工作できずに最近では警戒高まっているという始末だ。

「まあそういうことだから。偶には日本語教えに来なさいよ。アンタ国語の成績は私より上なんだから」

「国語だけな……ま、気が向いたら姉さんと一緒にいくよ」

じゃあな、と屋上から降りていく一誠を見送る。

人氣が無くなったところで、彼女は一つため息をこぼし、ベンチに座り込んだ。

「……はあ、なあにしてるんだろ私」

事の発端は、一冊の雑誌だった。

そこに書いてあつた今時の女子高生に関する記事を読んで、天野夕麻ことレイナーレは興味が湧いた。

墮天使総督であるアザゼル様やシエムハザ様などからの寵愛を受けようと日々頑張っていた彼女だが、薄々気づいていたことがある。

——所詮下級墮天使じゃあ、そんなの夢物語よね。

もうその考えが脳裏から消え去ることが無くなっていった頃に、その雑誌を見つけた。

今を楽しく生きる女子高生……凄く、羨ましく思えたのだ。

勿論寵愛を諦めきつたわけではない。只、自分は欲望によって墮ちた天使だ。

なら、こうして自分の欲望に素直になつてもいいじゃないか、と彼女は改めて頑張り
のベクトルを少し変えた。

寵愛のチャンスがあつたら勿論積極的に取りに行くが、それ以前に自分が楽しもう。

結果、動いた彼女は運に恵まれたといつていいだろう。

地上の甘味に釣れた墮天使の旧友2人と、勝手に地上に赴くことで何か違ったチャンスがあるかもしれないと野心を覚えた男墮天使を引き連れて地上に出た彼女はまず最初に金髪のススターを拾った。

珍しい力を持った少女は行き場を無くして途方に暮れていた。放っておいてもよかつたのだが、これはこれでチャンスだった。総督アザゼルは神器に目が無い。

持ちかえれば何かしらの報酬があるのは確実……だったが、ついさつき無断、ではないが結構狡い手段で地上に赴いたのに、とんぼ返りはなあ……と思つた彼女は、取りあえず保護して手元に置いておくことにしたのだ。

「そこまではよかつたのよ……あそこまでは」

根城にした廃教会の掃除は大変だったし、入学手続きもうまくいった。

バレ無い程度の暗示と、半年間馴染む努力をした結果、人型で街をうろついても問題なくなつた頃……兵藤一誠に会つた。

自分たちの住処の近くに、はぐれ悪魔が出没し、深夜だったこともあつて彼女たちは街の悪魔に知られる前に速攻処分することに決めた。

……偶然だった。本当に偶然、あと数分遅かつたらすれ違つていただろう。

彼女たちが現場に着いた時、一誠が丁度はぐれ悪魔を蹴散らし終わつていた。

——赤い籠手、翡翠の宝玉に浮かぶ竜の紋章。

そして何より強い龍の「氣」。一瞬で神滅具ロンギヌスの一角である赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手だと分かった。とても分かり易いチャンスだった。

―彼はこちらに背を向いている、相手は人間だ、一瞬でこちらの光槍が届く、殺せる、否、四肢を砕いて神器を回収出来るっ！

殺意と敵意、そしてチャンスに熱意が燃えていた。

そして、次の瞬間……思っていた光景とは全く違うモノが目映った。

ドンツと音が後で響いた。どうやってか一瞬で距離を詰められ、創り上げた光槍は籠手で握りつぶされ、もう片方の拳を叩きこまれた。

直ぐ近くにいた他の墮天使も応戦したが、瞬く間に鎮圧され、後は悶絶している間に殺されるだけ……のはずだった。

運は、レイナーレの味方をした。

夜中に飛び去る音を聞いたのだろう、駆け付けたアーシア・アルジェントが、レイナーレたちを庇うように兵藤一誠の目の前で手を広げていた。

これ以上はやめて欲しい、と。殺さないでほしいと、日本語が話せないながらも必死で伝えた彼女。結果、一誠はため息一つついて、「もう襲ってくんない」と其れだけ言い残して立ち去って行った。

「あの時は本当に死んだと思ったなあ」

ダメージは深かった。龍の氣は墮天使にも強く届いたのだ。

そして現場の隠蔽工作をする余裕もなく、彼女達も立ち去ることとなった。

「やつぱり、所詮下級には夢物語、かあ……」

階級だけではなく、実力的にも高くはないと心底彼女たちのその身に沁みる結果となった。

ドーナシーク：男墮天使だけは悔しいのかあれから鍛錬をしているようだが、それでもやはり未だ一誠とやりあえそうだとは思えない。

「……………やめやめ！今日は村山さんや片瀬さんと放課後遊ぶんだから、こんな沈んではダメでしょ私！」

頭を振って思考を切り替えると、レイナーレ……もとい、天野夕麻は屋上から走り去った。

欲望に忠実に、正しく墮天使として生きることにした彼女のこれからは、まだまだ続く。

第3話 加わる日課

早朝、剣道場にて。

防具も着けずに木刀を向け合う二人がいた。

一人は二刀持ちの金髪美少女、木場優奈。

「さあ、始めようか！」

「はあ…やる気満々だな、相変わらず」

相対するのは左手に厚めの籠手をして右手に木刀を持つている兵藤一誠。

ちなみに籠手の下にはさらにタオルまで巻いている。

「ルールは何時も通りの相手をKOもしくは降参させること」

「殺さない様に急所を狙う際は加減すること」

「何かあつたら全力でオカ研へ」

三つのルールを確認し終わると同時に、両者ともに駆け出した。

木場優奈の持ち味はスピードとテクニクだ。

二刀で切り刻み、特殊な歩法で遠近感を狂わせに来る。基本戦法はヒット&アウェイだが、時に二刀連続刺突とか威力的にえげつないことをしてくる。下手をすれば貫通す

る。

「つとむ！」

「惜しむ！」

一誠の強みは動体視力と攻撃力だ。

反射神経で二刀を捌き、籠手で弾く。そして隙あらば重い一撃を叩き込むのだ。

この早朝鍛錬は人知れず行われる。

何故なら、二人とも人間の動きではないからだ。

優奈の動きは人間が出せる限界速度を超越しているし、それを追う一誠の動きもおかしい。

一般人が傍から見れば優奈は消えているだろうし、一誠も同じく手足がブレまくって何かをはじいているようにしか見えないだろう。

「……」

言葉は両者の勢いが激しくなるにつれ無くなっていく。

無駄な思考を削ぎ落とし、相手を打ち負かすことだけに集中する。

挑発行為をして相手の冷静さを無くすことも戦法の内だが、この鍛錬は精神鍛錬ではなく純粹な対人戦闘が主だから、それは行わない。

—こんな風に人外鍛錬をしだしたのは、ほんの一週間ほど前の事だった。

この街は悪魔が統治しているとはいえ、はぐれ等の危険な奴らが集まりやすい土地となっている。

理由は簡単、ここに比較的手に入りやすい強い力があるからだ。それも二つ。

危ないという自覚はある。餌が自分からのこのこ近づくのだから。でも、バカだと罵られようとかまわない。

姉と決めたのだ、互いを護ると。決めたのだ、自分たちに降りかかる火の粉は自分達で掃うと。

だからその日も、姉と別々で見回りをしていた。

フラフラと、自分たちの勘を頼りにして歩き回り、敵を見つけては襲われ逆に消し飛ばす。

そしてあの日、消し飛ばした直後だった。

「兵藤、くん？」

「ン？ 木場さんか」

驚く優奈と違い、一誠は落ち着いていた。

こそこそ動いていたとはいえ、何時かこうして見つかつてしまうとは思っていたからだ。

詰まる所想定通り。寧ろ学園に入学した時点で「やらかした」と想定外且つ懸念事

項が起こつたくらいだ……一誠側としてはよくも一年気づかれなかったなあとは思っていた。

「……これ、兵藤くんが？」

「うん」

「…ああ…なんというか……なんだろう、どこか納得している自分がいる」

優奈自身、人間の限界レベルに抑えていたとはいえ、一般男子生徒が自分についてくることから可笑しかったのだ。凄い人だなあと思っていたが、その左手に顕現している神器を見て、納得している自分がいることに気付いた。

驚きが抜けないのか暫く間が出来てしまい、少し気ままずくなっていたその時、一誠の携帯が鳴った。相手は別行動していた姉だった。

「ん、もしもし姉ちゃんどした？」

『あ、一誠？なんだか蝙蝠が見てるんだよねー、多分どつちかにバレたっぽい。どうするー？』

「ああバレタの俺の方。丁度今木場さんに見られたところ」

『なーんだあ。じゃあ蝙蝠ちゃん？を愛でることにするねー。なんかデフォルメちゃん可愛くてさつきからもう……ああかわいい！』

「言ってる傍からとっ捕まえてるだろ!?!切れた」

携帯を手を持ったまま思わず呆然とする。

姉は我慢が苦手だから、電話しつつ蝙蝠を捕まえようとしていたのだろうと簡単に想像つく。

誰の使い魔なのか知らないが、可哀想に……思わず心の中で合掌する。

「えっと、取りあえず今からオカルト研究部の部室まで同行してくれないかな？」

「ん、いいぞー。姉さんにもメール送っとく」

「助かるよ」

こうして連れられた部室には、二大お姉さまと呼ばれるリアス・グレモリー先輩と姫島朱乃先輩、一年生では可愛いマスコット系として有名な白髪幼：少女搭城小猫ちゃん。そして、蝙蝠に導かれて真琴が後から入ってきた。

「さて……どういうことなのか説明してもらいましょうか」

「あー……大した事情はないですけど」

リアス・グレモリー先輩が部長らしく、簡単な自己紹介をした後にコトの説明をすることになった。

赤龍帝の籠手を持つこと、とある事情から姉も戦えること、待ちに入ってくる危ない奴を自主的に排除していること。

「とある事情とはなにかしらっ？」

「人には色々あるんですよっと、姉ちゃん。搭城さん困ってるから引っ付かないの」「えー」

可愛いから愛でたいのだろう。頭などでしてお菓子を与えていた姉の首根っこを引っ張る。

さあ事情も話したし帰ろうか、としていたら先輩が話を切り出した。

「ねえ、貴方達。悪魔に興味はない？」

「今のところはないです」

「……随分バツサリ来るわね……知ってるかもしれないけど、悪魔は優秀な人間を」

「悪魔に転生して仲間を増やしてるんでしょ？そこらの話は事の張本人……張本龍から聞いてます」

過去に合った天使、墮天使、悪魔による三大勢力の大戦争。

そして、その戦争の最中にライバルと大喧嘩したうえに、三大勢力を喧嘩の邪魔だと喧嘩の最中に喧嘩をふっかけるという意味わからないことをした二天龍の一角、ドライグ。

ドライグ自身は神器に封印されたが、その後色々な人たちに宿り回って現状を把握していた。

お蔭で戦争を壊滅させた奴自身から話を聞くという珍しいこととなったのだ。

「ああ、そうでしょうね……えっと、じゃあせめて契約してくれないかしら?」

悪魔側にとつては神滅具を持つ一誠は放っておけない存在。首輪とまでは行かないまでも、なにかしらの繋がりを持っていたかったのだろう。

「あ、じゃあ僕良いですか部長?」

「あら、優奈からなんて珍しいわね。何か頼みたいことでもあるのかしら?」

「はい、ちよつとだけ。：ねえ兵藤君」

「ん?」

「僕と契約してくれないかな?」

「契約内容は?」

「僕と本気の鍛錬をしてほしい。週に数回でもいいからさ」

「え、」

悪魔相手に本気の鍛錬とか……何かの拍子に事故死しかねない。

ただ、見返りが断りずらいモノだった。

「その代り……街に潜んでる墮天使たちのことを保護してもいい」

「「「!!」」」」

「ん?」

真琴以外の全員が驚いた視線を優奈に向けた。

「墮、天使：？ 優奈、それはどういうことかしら」

「墮天使が街に数人ほど棲み付いてるんです。何度か見かけました」

「……知ってたのかよ」

「僕、教会関係には敏感なんだ：で、どうする？」

「……ハア」

初めはアレだったが、今となっては仲の良いご近所さんだ。

スーパーでばったり会った時の気まずさと、その後のアーシアと真琴が言葉が通じていないにも関わらず仲良くなってつられるように段々蟠りも無くなったこと。そして最近の楽しそうな墮天使連中を思い出した。

「オーケー、その条件を呑もう」

「ヤッター！じゃあ明日からよろしくね！時間は人気のない早朝か放課後、もしくは両方で！」

「はいはい」

「あ、じゃあ私も私も！搭城ちゃんと契約したい！」

「？ 私ですか：？」

ほほ無表情の彼女が小首を傾げた。

それを見て勢いよく頷く真琴。

「お菓子作ってくるから一緒に食べよう！餌付けしたい！」

「……凄くド直球ですね……美味しくなかったら食べません」

「大丈夫、美味しいのも買ってくるから！」

「……まあ、いいですけど」

そんなことがあり、真琴は一誠が鍛錬している間にお菓子を準備し、放課後小猫を愛でながらお菓子を与えている。

平和な日常が、少しだけ物騒に、尚且つほのぼのとなったのだった。

——キーンコーンカーンコーン……

「……」

丁度、木刀を互いの首筋に振り降ろす直前でチャイムが鳴った。

ルールその四、制限時間は朝の登校時間まで。

「ふう、また引き分けかぁ」

「こっちは毎度毎度死なないかドキドキだよ……」

「アハハ、そんなに強いんだから大丈夫だよ」

「一応人間だぞこっちは!？」

「もし死んだときは悪魔に転生って話だからだいじょぶ」

何かしらの事情で死んだ場合、リアス・グレモリーの眷属として転生することになっ

ている。

……まあつまり、一誠は一回死んでもいいからこんな危ないことしているわけだ。優奈はちよつとの傷じゃあ死なないからと気楽に笑っている。

「なあんでそんな戦いに飢えてんだよ…」

「んー、強くなりたいからね」

「それ以上？」

「うん。もっともつと………」

——神さまだつて殺せるくらい、強くなりたいんだ。

そう言つて微笑んだ木場優奈を、兵藤一誠は初めて恐ろしいと感じた。

第4話 フェニックスのトラウマ

リアス・グレモリーは、所謂お嬢様である。

家柄も育ちもとても良いお嬢様。学園ではお姉さまとして親しまれており、学友にも眷属にも恵まれている。成績優秀で運動能力は抜群、悪魔としての階級だって魔力の質だって超良質。

そんな完璧超人にも、悩みはあった。

「で、どうだいリアス？ いい加減応じる気になったかい？」

「……ハア」

部室で自分に迫るホストにも似た金髪の男を見て、思わずため息を出してしまう。

彼はライザー・フェニックス、悪魔の中でも今は珍しい純血の悪魔の家のお坊ちやま。

そして、リアス・グレモリーの許嫁である。と言っても、リアスは認めていないが。

「そもそも、当初は大学を卒業するまでは私の自由だという話だったでしょう？」

「ああ、確かにそうだ。人間界の大学に行ってもいい、下僕も好きにするといい。だが皆心配なんだよ。御家断絶が怖いのだよ」

御家断絶……今は昔と違い、純血の悪魔というのは少数になってしまった。

戦争で大多数の純血悪魔が亡くなった上に、その後戦争が続けられない状態になったとはいえ、墮天使や神陣営とはにらみ合いの小競り合い、拮抗状態が続いている。その中で跡取りが殺されて断絶される、なんて言うのはよくある話だった。

純血の上に現ルシファアの血筋であるリアスと、古参のフェニックス家のライザーは、血筋も家柄も申し分なかった。周りはこぞって二人を結婚させたい条件が揃いに揃っていた。

「……」

リアスは兄がいるが、兄のサーゼクスはその優秀さから魔王に就任し、同時に「ルシファア」として家を出る形になった。

よって、家を継げるのはリアスしかない。そして、その彼女が婿を貰わなければ断絶の危機、ということだ。

「分かってるわ……でも、私は私の意思で相手を選び、結婚する。それぐらいの権利はあるわ」

「……相も変わらず、ハッキリものを言うなキミは」

ため息を一つ溢してやれやれと肩をすくめた。何を言っても無駄だと悟った……というよりも、元から理解していたのだろう。彼女は彼女の意思をもって彼女自身の道を歩く、故に、どこか変わった眷属を見つけてくるのかもしれない。

ライザーが改まった態度を崩したと同時に空気が弛緩し、ふと気づいたように辺りを見渡す。

「そういえば、優奈さんはどこ行ったんだ？ 何時もなら組み手を頼まれるところだが……」

「ああ優奈なら——」

リアスが外を指さした丁度その時、一誠と優奈が使っている剣道場が内側から吹き飛んだ。

「やらかしたア！」

「くう、後ちよつと、ホント小数点以下だったのに……」

「んなこと言ってる場合かよ!？」

割れた窓ガラスの向こうから言い争うような、楽しいな会話が入ってきた。

「……なるほど、把握した。・苦労してるな」

「ええ、ごめんなさいね、ちよーつとだけ行ってくるから」

「ああ」

紅い魔力を滾らせて、リアスは此処最近ですっかり慣れてしまった説教へと赴く。

あの状態の彼女には、龍の帝王だろうが戦鬪狂のイカレ騎士だろうが頭が上がらなくなってしまう。

「……その菓子、貰っていいか？」

「んゆ？ いーおー！」

「……どうぞで」

「あら、じゃあお茶を用意しますわ」

取りあえず近くで真琴が作った菓子を一個一個食べさせられていた小猫兩名に話しかけ、自分も分けてもらおうライザー。

ライザー自身、リアスの性格を理解していたためするだけ無駄だと理解していたが、それでもお家事情によってこうやって度々やって来ては同じような会話を行う。

自分の下僕とイチヤイチャしたいが、数億分の一くらいの可能性に掛けて来たり、そもそも自分の下僕とは違った麗しい女性が多いリアスの下僕と触れ合うのが目的だったりする。

「ところで、キミは？」

「んー、わたしは兵藤真琴、16歳！ さつき剣道場を爆破させた一誠のおねーちゃんです！」

ドヤ、と小猫を抱いて座ったまま胸を反らして自己紹介をする真琴を見て、そっかあーと思わず頭を撫でるライザー。

「（どう見ても人間なんだが……少しおかしな感じがするな）……ま、いいか」

「??」

撫でながら違和感を感じたが、美少女ゆえに寛大に、もしくは大分適当に思考の隅に流した。

これくらい、あの戦闘狂イカレ騎士に比べればずっとマシである。

(確かあの赤龍帝と契約したと言っていたが……あの様子じゃあご愁傷さまとしか言えんな)

全力全開の殺し合いじゃないから真の実力は測れないが、遠くから感じる力から察するに、木場優奈が全力を出しても問題ない力を持っている。

だからこそ、赤龍帝といえどもライザーは同情した。

木場優奈は美少女だ。金髪で健康的で爽やか……だが、戦闘となるとガラツと雰囲気が変わる。

神経を研ぎ澄まし、少しつり上がった眼は殺気を籠らせ、だが視線は探らせない。一瞬でも隙が出来れば空間を無視してるんじゃないかと勘違いするほどの瞬動術で間を詰めてくる。

両の手に禍々しい魔剣を持った彼女の本気の殺気と剣戟ときたらもう……。

(正直、二度とやりたくないな……)

不死鳥は特性上、肉体的に死ぬことは無い。だが、中身精神は別である。

昔、ライザーが見かけどおりのチャラ男だった時の話だ。

リアスを口説きに向かい見事に初の玉砕をした彼は、近くで木刀を振って鍛錬していた優奈を発見した。「綺麗な剣筋を振るう美少女とか最高だよな！」とはその瞬間の彼の感想である。

そして、休憩に入った際にナンパした……までは良かった。

「……フェニックスってあの不死鳥ですか？」

「ああ、その通りだ」

「つまり、死なない？」

「？ ああそうだが……？」

自己紹介をした後、ライザーの名前に気付いた木場優奈は畏まるわけでもなく、一瞬ゾツとするような瞳をしたかと思うと……こういったのだ。

「あの、一試合してもらえないでしょうか！」

「ハ？」

それはもうキラキラしていた。輝いていた。

だがさすがのライザーもナンパのつもりで話しかけたのに試合を申し込まれるとは思っておらず、思わず呆然。

それを勘違いしたらしく、更に優奈は付け加えた。

「勝ったらボクを好きにしているの!!!」

「よし乗った!!!」

リアスの断わりも無しに受けるわけにはとか、そもそも自分が誰なのか分かって申し込んでいるのかとか色々々と拒否する理由は浮かんだが、その一言にすべて吹き飛んだ。

「美少女からそんなセリフを言われて断れる男がいるか?! いや、いるわけがない!!!」

それが彼が後に放った言い訳である。

そして、始まった試合はそれはもうライザーにとつて、全く予想外の意味で忘れられないものとなったのだった。

——迫りくる剣群、地を埋め尽くす剣群、剣群剣群剣群……そして、それらを振るう黄金の狂乱騎士。

始めは服だけ燃やして羞恥心で動けなくしてから、言われた通り人気のない場所で好きにする……つもりだったのだが、全く目論見通りに行かなかった。

速くて巧い。炎が避けられ、捌かれる。更に下手に踏み込んでこず、決定的な隙を生み出すまで徹底したヒット&アウェイ。

当時はその不死性頼りで戦い方が雑だったライザーは、それはもう死にに死にまくった。

だがどうにか掠らせては衣服が薄くなっていく優奈を見ては、「この美少女をつつ!」

という男の欲望丸出しで挑みかかり、殺され、蘇り、半裸を見ては挑むという……どつちがイカれていたのか今思えばよくわからない想い出である。

だが、やはり一番オカシイのは木場優奈であろう。

半裸になった自分を気にせず、隙だと思えば迫りくる火焰をもともせず突っ込んでくる精神力。日頃の鍛錬による俊敏性と持久力を生かした十時間以上に渡る殺し合い。

そして何より——彼女は嗤うのだ。

自分が強くなっているという確認と、更に戦闘中に強くなっていく自覚を認識して、優奈は笑みを浮かべながら戦うのだ……終盤の頃はライザー自身戦闘の高揚と性欲のブーストが掛かっているにも関わらず、少し恐れを感じたほどだった。

そうして気付けば、リアスが止めるには激しすぎて、急遽リアスの母親であるヴェラナ・グレモリーによって物理的に止められるという力技により納まったのだった。

「……美味しいな、コレ」

「ん、どういたしまして〜」

結果年下の美少女に殺されまくり精神的にも負け気味で、さらに婚約者の母親にも迷惑をかけるという過去を経て、ライザーも流星に少し自信喪失に陥り、今では眷属たちと共に力を磨く日々を送っている。

(また切り刻まれるループは勘弁だしな……)

フェニックスゆえ刻まれた、死のトラウマを思い出しハイライトが消失したライザーは、甘い菓子と目の前の美少女たちで気持ちを和ませるのだった。

第5話 聖劍騷動勃発

ボクはあの日を忘れない――。

○

「はい、アーン♪」

「……………あむ」

今日も今日とて小猫を抱えて餌付けするように菓子を与える真琴。

何時もながら美味しい、寧ろ段々おいしくなつて行くこの味と真琴の暖かな体温にほだされていると自覚している小猫だが、今日だけは大分居心地が悪そうにしていた。

「……………あの、兵藤先輩」

「ん？」

「あ……真琴先輩」

「ほいほい？」

抱っこしている真琴だけではなく、目の前で掃き掃除している一誠も反応したのを見

て、呼び直す。

此処は駒王学園ではなく離れた場所にある教会。そこに契約した小猫は呼び出され餌付けされていた。

「美味しい？」

「ええ……それで、何故私をここに？」

「いやー、暇だったし日課をこなそうかと」

餌付けされている小猫も小猫だが、そんな彼女を愛でることが日常になっている辺り、真琴も大概だ。

「おツカれ、さま、でス、みなさん」

「ああ、ありがとアーシア」

拙い日本語でこちららにお茶を渡してくる、金髪の美少女シスター、アーシア・アルジェント。

彼女と墮天使たちが住まうこの教会に週一で通うのが、兵藤姉弟の日課なのだ。

「……あの、さすがに此処は居心地が悪いというか……正直気分が悪いです」

「ああ、そういえば悪魔だもんねー」

「先輩は私をなんだと思ってるんですか……」

「可愛い可愛い子猫ちゃん♪」

「ちよつと字が違う気がします…」

少し脹ふくれながらも撫でられ続ける小猫を見て、嬉しそうにほほ笑むアーシア。

彼女自身、小猫が悪魔だと分かっているし、一誠がドラゴンを宿していることも知っている。

全部知った上でこんな風に幸せな日常が遅れることが嬉しいのだ。

「楽しそうね、アーシア」

「はい！」

「ところでイツセイ君、この本の続きはちやーンともつてきたわよね？」

「ああ。というか、自分で買えよこのくらい」

「視ての通り金が無いのよ。毎日細々と暮らしてるのよ？ これでもね」

レイナーレこと天野夕麻は一誠に微笑むと……漫画本を受け取った。

「随分人間界に馴染んだようで何よりだよ……他の連中が見ればどれだけ驚くか」

「驚いたのはこつちよ……行き成り悪魔を引き連れてきて、今日からこいつ等にかくまつてもらうぞーなんて」

「いやあ、あの時のお前らの顔ときたら……ハハ、今でも笑えるな」

「もう完全に墮天使の裏切者よ私たちは」

「まあ許せ。じゃなきゃ今頃もつと大きな面倒事になってただろうぜ」

リアス部長たちと戦闘、敗北すれば墮天使諸共排除され、勝つても上級悪魔且つ現魔王の妹である彼女を打倒したとして悪魔勢力から狙われて結果死んでいたかもしれない。勿論原因である墮天使たちも例外なく……。

それを理解しているからこそ、彼女達もこうしてどやす程度にしているのだ。

「はあまあいいわ……最近、妙なのを見かけたわ」

「妙なの？」

「ええ。神父服を着た白髪の男よ」

「神父？教会からの刺客か？」

「どうかしらね、私は遠めに見ただけだから……ただ、ソイツ」

——聖剣を持っていたわ。

○

深夜、とある廃墟にてその男は楽しそうに歌っていた。

「今日も愉快痛快俺様大活躍ってかア♪」

白く赤い線の入った神父服を着たその男は、愉しように顔を歪ませ嗤っていた。

その手に握った剣からは血が滴り、彼の前には頭が数個落ちていた。

身体はバラバラにされ、そこから中に人ではない手脚が頭の数からは考えられないほど

多く転がっている。

戦闘の痕は眼に見えて酷い。辺りは斬痕、殴痕、破壊と血の匂いによって日本で考えられないような非日常が生み出されていた。

そんな獣系、爬虫系のはぐれ悪魔を殺し自画自賛をしていたその神父に、拍手が送られた。

「凄いね、頭の数と手足の数が揃ってない時点で、人間が相対するべき相手じゃないだろうに、ここまで一方的に殺戮するなんて」

「まあ俺たちは戦う正義の神父さんなので、これくらい当たり前のお手の物。で、誰だ嬢ちゃん？」

「しがない女子高生だよ——但し、ちよーつとバイオレンスだけどね」

ソードパース
魔剣創造によって生み出した二刀の魔剣を構え、木場優奈は聖剣を持ったその神父に

堂々と喧嘩を売った。

喧嘩を売るにはまるで相応しくない柔らかな笑みに応えるように、高々に嗤い声を上げながら聖剣を向けた。

「キツハーおいおい何がしがない女子高生だア!!魔剣にその猛々しい魔力!お前さんは正義の神父様を襲う、只の極悪非道の悪魔だろうがよオ!」

「アハハ、そつちこそ何が正義の神父様? もうちよつと優しい笑いを覚えてから出直した方がいいよ」

「ハ、正義つてのは正しい優しさだけじゃねーんだヨ。俺っちの正義殺戮の名の下に、とつとと消滅しやがれ腐れ悪魔が!!」

得意の素早さで迫る優奈に対し、相応あたいの速度で動いた。

人外に対し、人間の杵を超えた速度で対応する。

ただ速いだけではなく、剣戟は重く、その剣線は鋭い。

優奈が二刀という倍の手数を用いているにも関わらず、その一本の聖劍に全てが弾かれる。

気付けば、その速度は優奈を超えていた。

「どおよこれがぶつ壊されてバラバラになった聖劍、エクスカリバーの破片によって作られた超速ちよつぱやの聖劍こと天閃エクスカリバー・ラピッドリイの聖劍!!」

「く、あ!!」

「ちよーッつと速い程度の本端悪魔が、消えてろ!!」

魔劍が砕かれた優奈は、加速した神父の蹴りによって吹き飛ばされた。

「ケツケツケつと……ポーナスタイルは終わりか。まったくあの爺さんといひ墮天使様といひ、もうちよつと人の使い方を考えて欲しいもんだぜ。あんまり荒すぎると弱弱しい俺つちはくたびれちまうつての」

そう愚痴を溢しながら、聖劍の力を使って無駄に素早くその場から立ち去ったのだつ

た。

「う、あうあくく……人間の蹴りの威力じゃないなこれえ。痛たたた」

蹴り込まれた衝撃で壊れて崩れた壁から抜け出しつつ、優奈は呑気に部位を摩る。

「まあ聖剣の聖気^{オラ}まで加わってたら、そりや痛いかな。フー」

悪魔ゆえに聖なる力には弱いのが、同時にその力に対して他の種族より鋭敏でもある。

走り抜けていった聖気を追うのも、可能。

「行く」

痛みを無視して、優奈は走った。

○

第6話 幼馴染

兵藤家の朝は早い……わけでもない。

結構遅刻ギリギリな時もあるし、特に休みの日なんて昼間はだらけきった姉弟の姿がチラホラ見受けられる。

それを両親に半ば叩き起こされるわけだが、今回は少し違った。

ーピンポーンー

インターフォンを聞きつけた母が駆けていく音がする。

何時もなら後は母に任せて自分たちは各々勝手にしているのだが、今回ばかりは違った。

「なつかしいお客さんよ、起きなさいー!」

「なつかしい、お客?」

「マスター、取りあえず寝ぐせ直しますね」

「さんきゅーレイン」

レインに身支度を任せリピングでダラダラしていた姉弟は、オカルト研究部のメンバーや教会の墮天使たちを思い浮かべたが、来客者は全くの別人だった。

「驚くわよー。もうすつごい綺麗になっちゃってるんだから！」

「えつと、母さん……まず誰の事か教えてくれないと分からないって」

「んー女の子っていうのは分かるけど」

母が玄関から手を引いて連れてきたのは、栗色のツインテール美少女。

(……だれ?)

栗色、ツインテール、美少女……全く持つて失礼なことに、この姉弟は思い当たる節が無かった。

「アンタたち、本気で忘れてるわね……まあ私も言われるまで分かんなかったけど」

「えつと……久しぶり、二人とも！紫藤イリナだよ！……私、そんなに変わったかな？」

「まあ大分」

「そ、そうなんだ……そつちの子は？」

「レイン・ヒヨウドウです。よろしくお願ひします」

「紫藤イリナです。よろしくねー」

レインを撫でながらもちよつとシヨックを受けて居る美少女こと、紫藤イリナ。

名前を聞いて、ああと思いだした真琴と、全く持つて分からない一誠は意味の違う視線をジーツとイリナに集中させた。

「あのイリナちゃんが…」

「……ごめん、分かんない」

「アハハ、まああの頃はちよつとやんちゃだったからねー」

ちなみにちよつとではない。真琴が女の子だとトイレの時に気付くレベルで男の子
していた。

草むらに飛び込み、木に登り、虫に触って一緒に戯れていた。それもTシャツ短パン
短髪、寒いとその長袖パージョンという……まあ過去の話である。

「写真あるわよー」

ニコニコ笑顔で持ってきたアルバムには、彼らの過去が残っている。

……今の会話で堂々と黒歴史になりかねないものを持つてくる辺り、兵藤姉弟の母で
ある。

「うっわ、これ何時のだよ。全然覚えてねえ」

「アハハ、懐かしいねー」

「そうそう、この頃は5人で仲良くやってたよねえ。2人は元気？」

「え？2人？」

「？」

「え？」

写真を眺めていると、イリナが変なことを言い出した。

写真には3人が遊んでいるものばかりで、5人にはならない。

「えっと、ファイくんとリーダーだよ？覚えてない？」

「……」

全く持つて覚えがない二人だった。

そもそもこの二人の「濃い」記憶は小学生からだ。神器につられて様々な異形に狙われだした上に、訳の分からない奴に殺されかけもした。

お蔭でそれ以前の平和な記憶と今が繋がりにくく、思い出しにくいのだ。

「えっと、ファイ君はなんかこう、黒かったかな。いつも真つ黒な服着てた。たしかじーつとこつち見てたから、私が誘ったんだよ」

「へえー」

「リーダーは私が普通つてた教会にいた年上の男の子で、えっと確か暇そうにしてたから連れ出してきて……」

想っていた以上にイリナは強引だったらしい……思えば姉弟で遊んでいるときに入り込んできたのはこの子位だったような気がする。

「何でリーダー？」

「あの教会で年長さんだったからかなー。私たちとそんなに変わらなかったけど……」

あ、ほらこれだよこれ！」

そう言つて一枚の写真をイリナがみつけた。

そこには兵藤姉弟と、黒い長髪で紳士服を着た少年と白髪で目つきの悪い少年を両手で掴んでいるイリナが写っていた。

それを見てふと、そういえばイリナが引つ越してしまふ少し前に、思い出に一枚撮りたいと我儘を言われたことを思い出した。

それをきつかけに、そういえばと姉弟も思い出し始めた。

「あー、思い出した。イリナがどっからかひっぱつて来てたなそういえば」

「フイー君が何をさせても一番だったよねー。で、リーダーがむきになつて突つかかつてたっけ」

「懐かしいなー。元気にしてるかな、二人とも」

記憶の通りなら結構したたかな二人だったし、きつと問題ないだろうと笑いあつた。

「あ、そうだ。ねえ一誠君」

「ん？」

「ちよつと会つてほしい人がいるんだけど」

「別にいいけど：俺だけか？」

「うん。実は：」

そこで一区切りすると、イリナは一誠の耳元に口を近づけ、ささやいた。

「赤龍帝として、お話があるの」

「！ そつか……じゃ、行くか。姉ちゃん、外行くぞ」

「んー？」

「え、ちよつと一誠君？ 真琴ちゃんは知ってるの？」

「おう」

家から出ないと家族に聴かれる可能性もある。取りあえず席を立ち外に出る準備をすることにした。自分の部屋に行く途中、顔だけ振り向いてイリナに一つ大事なことを教えておく。

「というか、姉ちゃんの方が強いぜ」

それに驚くイリナと、笑いながら言いすぎだよーと一誠を追いかけてくる真琴。

なんの話だか知らないが、また厄介事かため息をつく一誠だった。

○

隠れ家に行っているある廃墟にて、イカレ神父ことフリード・ゼルセンが目を覚ました。木場優奈とやりあってから早数日。彼女はしつこく追ってきており、それを撒いてはお仕事のために外に出て、また見つかかり撒く、という生活が続いていた。

殺そうとしても実力が拮抗してきているのだろう、良い具合に逃げられてしまうの

だ。

「ア、ー、なあんだか懐かしい夢見ちまった気がする……こいつのせいだろうなあ」
仕事相手から渡された資料には、この街の危険人物と、恐らく追ってくるだろうという教会からの刺客について書かれていた。

そのうちの3枚には、最近発覚した赤龍帝の力を持つ兵藤一誠、その姉兵藤真琴、そして家族構成が事細かに書かれている。

もう一枚は、擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣を最近渡されたという少女、紫藤イリナの写真付きの資料。この計4枚が彼の夢見の原因だろうと、自分で検討を付けていた。

「随分美少女になっちゃってまア……」

昔よく親子で教会に来ており、名前は知っていた。

興味なんてさらさらなかったが、ある日向こうから遊ぼうと追ってきたのを苦笑いを浮かべて思い出す。あの活発で少年のような少女だったのが、随分と変わったらしい。

「ホント、変われば変わるもんだな」

そう、変わってしまったのだ。

彼も、彼女達も、もう手遅れなほどに変わってしまったていた。

「さあーって、今日もお仕事しましょうかねー」

過去を振りほどくように、その資料を聖剣でバラバラにすると、彼は隠れ家から鼻歌

交じりで立ち去った。今日も今日とて、彼の正義^{我儘}を執行するために、彼は動く。

第7話 教会からの使者

イリナに連れられたのは、近場のファミレスだった。

赤龍帝として呼ばれたのならば、従者である自分も行くと言ってレインも同行している。

「初めまして、ゼノヴィアという。教会の者だ」

「兵藤一誠、赤龍帝」

「お姉ちゃんの真琴です！」

「従者のレインです」

座っていたのは蒼の中に一房翠色になった特徴的な髪をしている、これまた綺麗な女の子だった。唯一疑問なのは、二人揃ってコートを羽織っていることだ。全体が視えなくて残念だと下心混じりに一誠は思った。

「で、話して？」

「単刀直入に言おう。聖剣が盗まれた、その確保に協力してほしい」

「聖剣が？」

聖なる力を宿した選ばれた者のみに扱えるという、あの聖剣だろうか…。

まあ兵藤姉弟と生まれて数年のレインは日本の漫画知識しかないから、詳細は違うかもしれないが。

「カトリック教会本部ヴァチカン、プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣エクスカリバーが一本ずつ盗まれたの」

「待て待て、盗まれたって一本じゃないのか?」

「大昔の戦争で折れたのだよ。それはもう見事なまでにバラバラになったそうだし、今はこのような姿になっている」

ゼノヴィアが傍らに置いていた、布にまかれていた物体を見せてくれた。

そこにあつたのは一本の長剣……悪魔じゃないが、中々の聖気を感じ、思わず凝視する。

「ふむ……悪魔と繋がりと聞いているが、思っていたよりそんな深い繋がりでないらしいな」

「え?」

「アハハ、実は私たち一誠君が悪魔に転生したんじゃないかなーって思ってたんだよね……聖剣を直に見てその反応なら、そうじゃないみたいだけど」

「ああそれはちよつと理由があつて……ツと、それより聖剣だ。その聖剣が沢山あるってわけか?」

「形はそれぞれ違うが、7本に分かれている。これは破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣という。カトリックが管理しているものだ」

「で、私が持っているのがこれ。擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣よ」

呪符で封印を施しているゼノヴィアと違い、イリナは紐のようになっていた聖剣の形を変え、一本の刀にしてみせた。

「これはプロテスタント側が管理しているわ」

「ほー…」

「へー…」

「はあ…」

「なんとというか、あまり関心がないんだな」

「いや、まあなんとというか…もつとヤバイヤツを知ってるからな」

「ヤバイ、奴？」

「ああ…イリナが引越して、フィーヤリーダーの姿が消えた後…中学に上がる前位にな」

思い出すのは、暑い熱気と、燃える景色、陽炎に揺れる聖なる姿。

「ヤバいつて、エクスカリバーより？」

「ああ…視た瞬間に死んだと思つたつて言つたらヤバさがわかるか？」

「事実殺されかけたけどねー」

アハハと呑気に笑う真琴に呆れながらも驚きを隠せない二人。

「で、でも今はその時よりずっと強くなったんでしょ?」

「ああ。悪魔の騎士相手に禁手使わず渡り合えるくらいにはな。だけど、今でも勝てる気がしない…つとまた話がずれたな。で、聖剣を盗んだ奴は?」

続きが気になったが、過去の話をしている場合ではなかった。

取りあえず今の話をするべきだ、と一誠はイリナ達を促した。

「えっと…墮天使よ。神の子を見張る者っていう組織の幹部、コカビエル」

「そのコカビエル一派がこの街に潜んでいるらしい。派遣したエクソシストは誰もが重傷、強いと上層部から太鼓判を押されていた者は殺されている」

「マジか」

「マジよ。重傷者からの情報によると、聖剣を振るう神父が敵にいらしいわ…この情報を持ってきてくれたその人は告げた直後に死んだわ」

「…そんなヤバい話なら、リアス先輩たちにも協力してもらった方がいいんじゃないか?あの人…悪魔たちはこういう話なら受けてくれると思うけど」

「駄目よ」

一誠の提案を跳ね除けたのはイリナだった。

「私たちと教会は悪魔を信用してないの。というか、私は本当は一誠君たちに頼むのだったてしたくないのよ。悪魔とは違う意味でね?……でもゼノヴィアが」

「私は幹部や聖剣を奪えるような奴らに特攻掛けて死にたくないからね。出来ることは出来るだけやって生存率を上げたい……なんせ、破壊して逃げかえるだけでも無事な確率は三割ない。上には任務遂行して来いと送り出されたのだから、任務を遂行する為にも勝率は高めておくべきだ」

「……なるほど、上手い具合に言いくるめられたわけだ」
「うう」

教会にとっては聖書の神を殺した二天龍の力を借りろ、なんて言うはずもない。精々無干渉だろう。まあだからこそ借りるなど言われなかつたんだろう。

「でもどうするんだ? 此処はリアス・グレモリー眷属の納める領地って聞いてるぞ?」
「明日の放課後、そちらの学校に赴いて不干渉をするよう伝えるつもりだ。力を借りても、土壇場になって手を組まれてもしたら厄介すぎる」

「へー……まあ手を組むとかは無いだろうけど。まあどのみち連休が終わってからってことか。……あ、そういうえば今日とかどこに泊まるんだ?」

以前イリナが住んでいた家はもう別の家が建っている。

となると、彼女たちはどこに住むのだろうか……もしかして、と思い当たる節があつた

一誠は尋ねた。

「ああそれなら今は使われてない教会があつて」

「まじかー……」

「え？え、なに?？」

「えつとね、実はね」

二人に一誠と真琴が悪魔と契約することにした経緯を話す。

ついでに、今そこに住んでいる堕天使とシスターはイイ奴……というか、今回の件に
関して絶対無関係だから、と事情込みで話し込んでいく。

「シスターアーシア、か」

「? アーシアちゃんがどうしたの?」

「いや、彼女は聖女と持て囃されていたが、悪魔や堕天使までをも癒す力があつてな。魔
女として追放されたのだよ」

「あーだから堕天使たちと一緒にいたんだ」

「知らないで接してたの!？」

「そりゃ俺は赤龍帝フリーステッド・ギアの籠手持ちだし、堕天使やらシスターやら重要視するほどでもない
かなーと」

「度量が大きいのか只の阿呆なのか」

呆れたような声を出す二人に、むっとした表情を浮かべて今まで口を出さなかったレインが口を開いた。

「悪魔や墮天使をも癒すなんて理由で追放するような教会よりは、マスターたちの方がよっぽど器量が広く深いに決まっているでしょう。阿呆なのは貴女方で、只神の懐が狭いだけでは？」

レインの言葉に、一気に温度が冷えたような錯覚を覚えた。

ああ、ヤバいと一誠が冷や汗を流した直後、威嚇するレインに対し敵意を持ったのだろう、二人の瞳が危うい光を帯び始めた。

「聖女に必要なのは神の愛のみ。それがあれば生きていける、それが聖女で、それゆえに悪魔や墮天使を癒すなんてことはあり得ないわ」

「あの人は只優しいだけのシスターです。追放されたにもかかわらず神を信仰してるとても素晴らしい人格者ですよ。そんな彼女を救いもせず見捨てた神の方がよっぽど悪魔的かと思いますが」

「ツ神は愛してくれていたさ。何も起こらなかつたとすれば、彼女の信仰が足りなかつたか、もしくは偽りだったのだよ」

段々ヒートアップしていく三人を見て、ああもうこりやダメだなと一誠は頭を抱えた。

出来るなら墮天使と一緒に暮らしているシスターをこの二人に紹介するのは避けたかった。こうなることが目に見えていたからだ。

アーシアは今は幸せそうに、本当に幸せを享受して生きているが、出会った当初は悲しみに目が沈んでいた。そんな彼女と一番打ち解けたのは、毎日学校に通っている自分達より時間が多く取れ、その分ずつとアーシアと一緒に居られたレインだろう。

もしかしたら、レインはアーシアのことを知っていたのかもしれない。きつとアーシアが話してくれたのだろう。墮天使連中はその辺話すようには思えない。

それだけ思いあっているからこそ、アーシアを救ってくれない神も教会もレインにとつては只の邪悪というわけだ。

「アーシア・アルジェントは我が主の守護対象であり、何より私の親友です。彼女を害するというなら、私は貴女方……いえ、貴女達全員を敵にしても戦います」

「それは、我らの教会全てへの挑戦か？ 何者かは知らないが、高々従者ごときが大口をたたくね？」

ついに宣戦布告までしてしまったレインを見て、あーもう仕方ないと腰を上げた。

「すとーっつぷー！」

「……すいません、熱くなりましたマスタア」

「ああいや、お前の気持ちはわかるというか、人間らしくなってきた嬉しいよ」

「レインちゃんはアーシアちゃん大好きだもんねー」

いい子イイ子と真琴が頭を撫で、さすがのレインも人のいる前では恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「……まあ私たちも言いすぎた節はある。…が、こうまで言われて黙ってるというのは、こちらの沽券に関わる」

「だろぅなー……はあ。まあこつちが売った喧嘩だ、仕方ねえか。ちよつと離れたところの人気のない場所があるから、そこで思う存分、殺さない程度に喧嘩っていう力比べでもしようぜ？」

「……そうだな、そちらの力を確かめるいい機会だ。教会に知らせない、私的な決闘というか」

「手加減しないからね」

「頼むからお互い殺さない様にしてくれよなー…二対一はあれだし、俺が組むとするか」

「んー、私いこうか？」

「いや、姉ちゃんは審判頼むわ」

「りよーかーい」

こうして、離れの小高い丘にて決闘という名の喧嘩をすることになった。

第8話 戯れ

籠手、劍、刀。各々の武器を出しつつ、それぞれが向き合う。

ちなみにレインは素手である。

「マスター、すいません私のせいで…」

「ああ大丈夫だつて。それよりやりすぎんなよ？相手人間なんだからな？」

「はい」

冷静さを取り戻し、余裕な二人を見て、イリナとゼノヴィアが口を挟んできた。

「あら、別に三対二でもいいのよ？」

「ああ。こちらの聖劍は下手をすればその神器に勝る代物だぞ」

「ああ別にいいっていうか……こっちは配慮してるんだぜ？」

「え？」「なに？」

ニヤリと悪い顔をした一誠は、挑発するように指をクイツと曲げて挑発した。

彼はレインほど親しいわけではないが、それでもアジアを友達だと思っている。

二人の考えはきつと長い時間教会にいたから沁み込んだ仕方のないもので、二人が悪
いわけではないのは分かっているが、やはりそれでも、苛立ちは仕方ない。

「赤龍帝が相手だったから負けても仕方ないって言い訳を作ってやってんだよ。分かったらかかってこい、何時でもいいぜ」

「このっ」

「上等だ!!」

「マスターはやっぱりマスターですね……」

威風堂々、小学中学高校と其れなりに激戦を潜り抜けてきただけあって、中々ドラゴンらしい威圧感が素で出せるようになっていた。

そんな一誠を尊敬の目で見つめるレインだが、一誠の兆発が効いたのだろう。真琴の「いつでもスタートしていいよ」という間の抜けた言葉が場に抜けた瞬間、教会二人組が奔り寄って来たのでそちらへ意識を集中させた。

(にしても、神は愛していた、か)

兵藤姉弟はドライブから直接聞いている。二天龍をどうにかしようとした神、魔王は我らが殺したと。まあドライブたちは返り討ちのような形で神器封印されたらしいが。

ともかく、二人の様子からして聖書の神が不在だという事実は知らされていないらしい。

レインには話す機会が無かったから言っていないのだが、この喧嘩……。

(ホント、無意味というのかなんというか)

そもそも神が神器として配ったのだから、どんな神器だろうと神の意思による行為だと考えられないのだろうか？……人間は潔癖なところがあるから、無理だったのだろうな、とイリナの攻撃を捌きながらボーっと考える。

「この、なんでボーっとしてるのに躲せるの!？」

「いや、うん……何かゴメン」

純粹に遅い。木場優奈という高速の騎士相手にしてきたからだろう、イリナの攻撃はともスローに思えた。しかも変幻自在に形が変わるといわれても、振るってるのはイリナ自身。彼女の目線やらそのノロマな動きやらをじーっと観察していれば、何となくで避けられてしまう。

緩急効いててやり辛かった優奈と違い、正直すぎるというか……。

(やつぱアイツが異常なんだろうなあ)

小耳にはさんだ話によれば、不死鳥にも喧嘩を売って勝ったことがあるとかないとか……そんなバトルジャンキーと毎日のように稽古して居ればこうもなる。

(…あれ、そういやこの連休中木場から連絡ないな…)

暇があれば稽古稽古!と忙しなく引っ付いてくる優奈の姿を、そういえば見かけていないことを今更ながら気づいた。

授業には参加していた、放課後部室に居たのも覚えている……だけど、思い出せば部活

の時間が終わったら何処かへ居なくなっていなかったか？

(今更ながら、アイツこの騒動に関わってないだろうな…?)

ちよつと心配になってきた一誠は、終わったら優奈に連絡することを決めた。

その後、遂にイリナの動きをそれとなく誘導することで、かすりもせずに無駄な力を使わせることでイリナの体力切れを起こすことで勝利した。

○

レイン・ヒョウドウ。

この名前を貰ったのは、主たちが小学生の頃だ。

生まれて間もないながらに強い力を持っていた彼女は、同胞に異端とみなされ、氣づけば独り違う場所に居た。

周りに人間食糧はいたが、街に住まう複数の悪魔の気配を察して下手に動けなかった。

悪魔程度どうにでも出来たが、遠い場所から無理やり転移してきたため、かなり疲弊していたのだ。

そんなレインに魔力を与え、名を与え、同胞でもなれなかった居場所になってくれたのが、兵藤姉弟だった。

—「一誠、この子飼おう!!」

—「ハ？」

今思い出しても突拍子ないというか、ドラゴンの子を見て第一声がソレだった真琴にはある意味脱帽してしまう。一方的な恩を受けたとはいえ、呑気に抱きかかえられた自分も自分ではあるが……。

ともうかく、当初はそんな人たちを警戒していたが、後々それもバカらしくなっていくた。

(懐かしいな……)

当時は強い力を持った小さなドラゴンでしかなく、こんな人型にもなれなかった。

あの日までは……覚えてるのは、赤い焰と真つ赤な水に沈むご主人様たち

自分が発した雷はまるで相手にされず吹き飛ばされてしまった無力感。

そして、地に落ち混じって一つになった主達の血を舐めたあの時覚醒した自意識を、レインははつきり覚えている。

「考え事とは、余裕だな」

「まあ遅いので」

バチツと蒼い雷が身体から時折漏れ出て音を立てる。

レインとゼノヴィアの戦いは既に勝負になつていなかった。

生体電気を操作し、加速することでスローモーシヨンに映る世界をドラゴンの膂力で動き回るので。聖剣の力を借りているとはいえ、只の人間の攻撃が当たるわけがない。

そしてなにより、この戦いの無為さを理解していた。

聖なる力、聖なる者、其れを意識して今まではぐれ達と戦ってきたのだ……今更この程度、戯れにしかない。

「左腕解放」
レフト・リリース

「は？」

スツと振り下ろされた聖剣を右側に、ギリギリ肌を掠らないように避けたレインは、帯電した右手で聖剣を持つ手を強く叩き、聖剣を落とさせ、そして左腕だけを本来の形状に戻した。

蒼い鱗に包まれた巨腕、どう見ても人のそれではなく伸びた鋭利な爪は雷を帯電して

いた。

「蒼雷……極小」
ソウライ

「アバ!？」

爪で傷つけないように大きな掌でゼノヴィアを掴み取り、そのまま電流を発す。

人間界で売っているスタンガンよりずっと強力なのだが、気絶しないことに少し驚く。

「は、はの」

「えい」

「ウアッ!? ―ちよ、ちようしに」

「えい」

「ミッ!?! ほうしに、のりゆ、な」

「えい」

「ア――」

こんな調子で気絶するまで続けた。

最終的に電気でビリビリと痺れた上にろれつが回らなくなったゼノヴィアが転がることとなった。

○

「ま、まさかドラゴンだとは……」

「結局かすりもしなかった……」

ズーンという擬音が聴こえてくるような落ち込み方をしている二人を見て、手加減しない様にしたが逆効果だったかもしれないと一誠たちは思った。

「いえ、その……破壊の聖剣とか直に触れるわけにもいかないじゃないですか」

「擬態の聖剣とか自由に振るわれると面倒だしな。最後の方俺の動きにつられてた自覚あったか？」

「グ、ハ」

決して二人が弱いわけではない。

人間としてはあり得ない強さを持っているが、相手が更にあり得なかった、というだけである。

「まあそんな感じで二人の勝ち〜♪」

「んじゃそういうことだから。あとで教会連中と会つてもさつきみたいなこと言うなよ？」

「く、仕方ない……ん？なあ、あれ」

ゼノヴィアが指差す方向にそのまま視線を移す。

目に映った光景を、しばし一誠たちは疑った。

「たしか、教会がある方角じゃ……」

もう夕暮れという事もあり此処からでは教会は見えにくい。

だが、一誠、真琴、レインの人外染みた視力はハッキリと捉えていた。

廃教会に、巨大な光の槍が突き込まれようとしていた。

第9話 契約

時は遡り、一誠たちが喧嘩を始める少し前になる。

「ハー、おたくもしつこいね」

「まあその剣には色々因縁があるからね。それに神父とか大っ嫌いでさ」

「ハハハ、そいつは奇遇だねえ！俺っちも悪魔が大っ嫌いだよ」

今日も今日とて悪魔狩りやらエクソシスト狩りを行っていた彼、フリードを見つけた優奈は無言で背後から斬りかかり、隠しきれない殺意や怨念を感じかれ防がれていた。

「ん？おろろ？これはどういうこった？」

「！しまった、また面倒なところに……」

斬り合いながら移動していたためだろう、何処に向かっているかなんて集中していて気付かなかった優奈は廃教会へとたどり着いてしまっていた。

「あれ、優奈さん？それと、神父様？」

「……アーシア、下がってなさい」

これから買い出しなのだろうか、天野夕麻の姿をしたレイナーレとアーシアがちやうど出かける様子で教会から出てきた。

「なんの騒ぎっすーって聖剣？」

「エクスカリバーね…どうしてこんな場所に」

「……」

さらに騒ぎを嗅ぎ付けたのだろう、ゴスロリの服を着た金髪ツインテの少女と、藍色の長髪の女性、コートに深く帽子を被った長身の男性が出てきた。

ミツテルト、カラワーナ、ドーナシック……全員、一誠たちが匿うと決めた墮天使たちである。

「あーらら？何で墮天使さん方がおそろいで？見たところこつち…関連じゃないようだけど」

「ほお、良い事を聞いたよ。そつちには墮天使が関係してるんだね」

「木場優奈、一体どういう状況なのこれは」

「いいんで下がっててください、さすがに護りながらは……——」

闘い辛い、と言おうとしたその時、優奈に悪寒が奔った。

聖剣だけでも十分すぎるほどに寒気がしていたが、これはそれとはまた別者だ。「報告では死んだと聞かされていたんだが、生きていたのかお前達」

—光だ、濁った光だ。自分を殺す、危うい存在だ。だから、だから、ダカラ—
危険信号と生存本能が一斉に鳴りだした。

結界など張っていないため、通信なんてやり放題だろうけど、こんな一瞬で来れるとは思っていないかった。敵は思っていた以上に大きいと今更ながらに理解した。

——ダカラ、ドウシタ？

危機感を察知能力へと変えろ、震えを沈めその心意を昂らせろ。

お前の敵はなんだ、お前の憎んだものはなんだ、お前が——殺したいものは何だったか
思い出せ。

「……」

見据えるのは滞空してこちらを見下ろしてくるその姿。

幹部クラスだと察せられる翼の数に、油断なくその手に持つのはこちらを蒸発させることができるであろう威力を込められた光の槍。

彼の名を、レイナーレが震えた口で呟いた。

「コ、コカ、ビエル、様……」

「その様子だと、裏切ったのか」

「ち、ちがうっスよこれは——!？」

弁明しようと口を開いたミッテルトの頬を掠めるように、小さな槍が飛来した。

だが、一瞬時間は稼げた。

「――」

狙うのはコカビエルではなく、神父フリード。正確にはその手に持つ聖剣だ。

手首事叩き斬って、聖剣を盾に交渉を掛ける、それ以外に碌な時間稼ぎも手も思いつかなかった。

壁を作ったのは優奈自身、だからこそそれを自在に消せる。行き成り消えた目の前の巨剣、その一瞬で現れる優奈の高速の剣戟――それは、同じく高速の剣閃によって防がれた。

「おおつとあつぶねえ!!」

「くっ」

「まあ直情的に段違いに強い奴狙うよりはずっとマシだが、ナ!」

弾かれるように距離を取る。自然と、最初の位置である廃墟を背に庇うように立った。

「なるほど、下級とはいえ：いや、だからこそ知恵は回るといわけか……まあとんだ浅知恵だったが」

敵とすら認識していない、ふざけるなど思わず叫びそうになる口を噛みしめる。

「此度の白龍皇のライバル関係である赤龍帝がいると聞いて警戒していたんだが……アイツならこれだけ近くで騒げば、嗅ぎ付けて邪魔立てしてくるだろうに、赤龍帝は氣付いてすらいらないようで、残念……いや、僥倖か」

(なるほど、一誠君を警戒していたのか……)

残念ながら、連休が重なっているときに起こった事を彼らが知り得るはずもない。

だって、彼らは神器を持っているだけの人間で、そんなことを教えてくれる伝手は……。

(ああ、いや……それは僕の役目じゃないか)

非日常の悪魔である自分こそが、契約者に対して警告の一つとしてでも伝えておくべきだったのだ。

「茶番は終いにしよう、気づかれる前に、死ぬ」

ポツツツと手に持っていた槍が極大化した。

凝縮していた力を、完全に解き放つ気なのだろう。

(この状況は自業自得だ……だからこそ、契約者として、最低限の責務は果たそう!!) 迫ってくる巨槍に対し、さつき以上の巨剣を大量に創造する。

質ではどうしても劣る、だからこそ数で時間を稼ぐしかない。

荒つぽく創造したせいかさつきよりも呆気なく破壊されていく巨剣たち。

「それで、いい!!」

ぐるっと体を回転させ、背中を向ける。

後ろにいたメンバーは振り向いた際に魔力を使って吹き飛んでもらった。残念ながら、小柄な上に座り込んでいたミッテルトは振るった腕から外れてしまったため、抱え込む。

アーシア・アルジェントさえいれば、大抵の傷は治してもらえる。

「ごめん、投げる力も残ってないんだ」

魔剣創造を無茶な使い方をしたせいで、彼女を遠くへ投げるだけのスタミナもない優奈は、ミッテルトを庇うために出来るだけ力強く抱き込んだ。

死力を尽くして作り続けていた魔剣の最後の一本が破壊されると同時に、巨槍が爆発。

優奈は、聖光の爆裂を間近で受け止めることとなった。

「!!!」

光に吞まれる寸前、誰かの声を聴いた気がした。

でも、其れを認識する前に——彼女の意識は、途絶えた。

第10話 笑み

只々、救い難く憎らしい、けどもそれは赦されない――。

○

その槍を見て呆然としたのはコンマ秒にも満たない僅かな瞬間だけだった。

レイン、一誠、真琴の三人の足元に一瞬だけ魔力が満ち、爆破にも似た超速移動を行った。

魔力を用いた『瞬動術』というこの移動法は、完成系ならば移動したと思わせない静かな超速移動を可能とするが、今は追いつくことが最優先で、足場にした地面や屋根に亀裂が入ろうと気にせず駆ける。

イリナとゼノヴィアを置いてきたが、あの二人なら後で追いつくだろうと今は思考から排除する。

（―ダメだ）

だが間に合わない。

「はい、め……」

謝るな、全て己の行動の結果だろう。

許しを請うな、それは託してくれた者への冒瀆だ。

「ありが、——」

礼など言うな、自分たちを傷つけ、自分が斬り裂いた者に言うべき言葉じゃない。

何も語るべきではない、何も伝えるべきではない。

その全ての血が、命が、自分が生きる為だけに、自分を生かすためだけに流れているのだから。

享受しろ、全てを啜れ、恨みも祈りも全てを飲み込め。

そして、魔劍と聖劍を持った少女は、無言でとある研究所から姿を消した。



コカビエルの目に映った光景は、想像からかけ離れたものだった。

あの槍の威力を防げるものは此処にはいない。聖劍を持っているフリードでさえ、自分が壁を作ってやらなければ吹き飛ばされていただろう。

悪魔は蒸発し、裏切り者は消滅し、その住処は爆散していたはずだ。

(……今のは)

槍が最後の魔剣を貫き、あの悪魔へと迫る寸での所で、赤い稲妻が割り込んできていた。

だから、目の前の悪魔は大火傷程度で済んでいるのだ。

こうなった原因なんて、一つしか思い浮かばなかった。

「吹き飛ば、クソ天使!!!」

「やはり、お前か赤龍帝!!!」

行き成り目の前に飛び込んできた赤い籠手を顕現した少年に向け、作り直した光槍を振るう。

龍の氣と濁った光がぶつかり合い、衝撃波となって撒き散らされる。

両者ともに数メートル吹き飛び、コカビエルは滞空、一誠は教会の屋根に着地した。

フリードの前には真琴が立ち塞がり、重症の優奈と軽症のミツテルトがアジアに治療されているのを確認すると、一誠はコカビエルを指さし叫んだ。

「テメエ、俺の友達傷つけてタダで済むと思うんじゃねえぞっ!」

「ハハハ、龍の力を持っただけの、たかが人間が良く咆えるじゃないか。まったく、今回の二天龍の勝敗は目に見えてるなこれは」

「関係ねえ話してんじゃねえ!!」

「Boost!」と籠手からドライブの音が響く。

未だ数回目とはいえ。一誠の怒りに応じるように溢れ出している龍の気は、どう考えても常人のそれを超えていた。

「ン？……どういうことだ」

怒っていたのは一誠だけではない、真琴もだ。

普段喜怒哀楽から怒と哀を抜いたような表情しか浮かべない真琴が、珍しく目の前の敵を睨み付けている。

だが、コカビエルに真琴の表情などどうでもいいことだ。

問題はそこじゃない。

「なぜ、その女からも赤龍帝の波動が出ている？」

龍は感情によって力を引き出しやすい。

怒りは特に力が荒ぶり、周囲の存在に畏怖の念を抱かせる。

そんな力が、少女からも起こっていた。

「余所見か、余裕だな」

「チツ」

思考を中断させるように、一誠の拳が叩き込まれる。

槍で防ぎ離れようとするが、魔力を足場に空中を超速で駆ける一誠からは逃れられな

い。

この移動術も虚空瞬動と言い、気や魔力を使って空を駆ける術である。

世の中にはこれをガチで空気を踏みしめて素の身体能力で行う化物がいるらしいが、

一誠は魔力を用いて行っていた。

「貴様、本当に人間か!?!」

「……」

コカビエルからの問いには応えない。

返答は、その溢れる氣を込めた掌底で行った。

バギツ―コカビエルの持つ槍から嫌な音が響いた。

「バカな、光を砕くだと……?」

「オオオオオオオ!!」

「このっ」

一誠たちが空中で戦い始める中、真琴とフリードは両者どちらも動かないでいた。

「……襲ってこないんだね」

「ああ、まあ理由がねえしな」

「……」

ふてぶてしいその態度に、どこか既視感を覚えた。

懐かしい、とても懐かしい古い感覚だ。

だがその違和感を成長して雰囲気すら変貌したフリードから察することは、真琴にはできなかった。出来たのは一人――。

「え……リーダー?」

後から追いついてきた、紫藤イリナだった。

「あん?」

「やっぱり、リーダーだよね……? なんで……」

怪訝な顔で振り向いたフリードの顔を見て、過去自分が連れまわした白髪の少年を思い出した。

そうだ、彼は何時もこんな風にあふてきて、どうしようもなく素直じゃなかった。

「私の事、わかる?」

「紫藤イリナ、兵藤真琴、兵藤一誠……覚えてますヨ」

忘れるはずがない。

捨てられて何もなかったフリードに唯一出来た繋がりだった。

「イリナ、気を付けろ。知り合いかもしれないが、そいつはもう」

「……うん、わかってるよゼノヴィア。これも、主が与えてくださった試練だよね!」

すっかり神への信仰に嵌まっているその姿を見て、忌々しげに舌打ちをするフリー

ド。

「神、か」

フツとフリードの姿が掻き消えた。三人は目では追えていた……ただ、反応すること
はかなわなかった。

「くっだらねエ」

イリナとゼノヴィアの背後に現れたフリードは、血が付いた聖剣を振り、擬態と破壊
の聖剣を片手で弄んでいた。

「え…?」

「ア…」

教会の聖剣使いとして送り込まれてきた二人が、あっけなく倒れ込む。

完全に天閃の聖剣を使いこなした彼の速度は、光の速さに迫るほどになっていた。

「イリナちゃん、ゼノヴィアちゃん!!」

叫ぶ真琴の音が響く。だが、彼女は動けない。自分がこの場を離れようとするれば、
その瞬間にフリードは墮天使と悪魔、そして魔女と呼ばれ異端視されているアーシアを
斬り殺すだろう。

「あ、う」

「……俺にとって、あの頃は天国だった」

捨てられ、絶望し、誰にも馴染むことなく全てを呪っていたあの頃。

そんな自分を救い出したのは、彼らだった。

特に自分を引つ張って行ってくれたイリナには感謝してもしきれない。

「だがもう終わったんだよ、オレっちはさ」

ニヤつと狂った笑顔を倒れ込んだイリナに向け、そちらへゆつくり歩きだす。一歩一歩、踏みしめるように。

「この廃教会な、あくどいクソ神父が運営してたんだわ。イリナの親が街に居た頃は、そいつらの顔色伺って何もしてなかったけどな」

でも、イリナの両親はこの街に居たターゲットを殺した後、直ぐに引つ越してしまった。

「すぐに何かがあつたわけじゃないさ。暫くは兵藤達やフィーと遊んでた」

でも、その幸せもすぐに奪われてしまう。

「ある日、夕飯に薬混ぜられてな。目が覚めたら、聖剣の担い手を造りだす、なんて訳の分からない研究所に連れてかれてな……そこでぶつ倒れてる悪魔ちゃんも、俺の同胞って聞いているが、あの場には見かけなかったあたり、色々な場所でやってたんだろうな」

研究所は正に地獄だった。

流し込まれる薬、空气中に散布されている薬、食べ物にすら薬。

中毒症状や禁断症状、幻聴幻覚、そんな中行われる改造手術。死んでいくものが大勢いた。

「そうして創り上げられたのが俺たちで、その悪魔ちゃんだ……もう目え覚めてんだろ？」

「……ぼく、は……未完、成で……出来損ない、だった」

「！ 優奈さん、喋っちゃダメです！」

ようやく意識が戻ったのだろうが、重傷だった精神までは回復しない。

幻痛だつて起こっているはずなのに、木場優奈は立ち上がった。

「ああ、俺たちもあの実験は調べつくした。書かれてたぜ、廃棄される直前になつて覚醒した聖剣使いがいたつてな。まさか魔剣使いに変貌しているとは思つてなかつたが」

「違う」

それは違う、完成したんじゃないし命の危機に应じて覚醒したわけでもない。

魔剣に落ちたわけでもない。これは、これは――。

「これは、あそこにいた、みんなから、貰った遺品だよ」

自分より生きたかつた子がいた、自分より夢を持っていた子がいた。

彼らに貰つたこの力で、人を殺めることだけはしたくなかつた。だから、魔剣しか使わなかつた。

そして、そんな彼らが死んでいく中、自分だけは生き残ってしまった。何故か。

「皆が託してくれたんだ。優しくしてくれてありがとうって、もう自分は限界だって、祈っても死んでしまうって——私たちが死んでも貴女だけでも生きてって」

聖剣を振るうに値しない、小さく使い道がなかった聖なる因子は魂魄に導かれ、木場優奈に集まり一つになった。

そして、その祈りは、願いは優奈にとつて祝福呪いの言葉だった。

苦楽を共にした、大事な仲間だった。大切な人たちだった。そんな人たちに願われては、命を救われてしまつては、もう木場優奈はただ死ぬわけにはいかなかった。

だから、研究者たちを殺し、仲間の死骸を踏み台にして前に歩き出したのだ。

それ以外選択肢なんてなかった、それ以外選択する余地なんてあり得なかった。

「僕は、神父が嫌いだ」

「ああ、俺つちも嫌いだ」

自分たちを、仲間をこんな風にした神父が憎かった。

だから木場は殺した、だからフリードは探して殺し回った。

「あの研究に関わっていた、全てが憎い」

「ああ、だから墮天使も悪魔も殺してる」

人間だけではない。あの研究には数多のはぐれ達も関わっていた。

「そしてなにより、自分たちを見捨てた神を殺したい」

あんな状況に陥りながらも、信仰していた。あの瞬間までは、救いを渴望していた。絶望しながらも生を諦めなかった、なのに——神も何も救ってはくれなかった。

「見守ってるなんて嘘だった、ホントだとしたら、只見捨てただけだった」

「そんなやつを信仰なんざ、する気になれねえよな」

だから、木場は悪魔になった。

だから、フリードははぐれ神父に堕ちた。

二人は似ていた、二人は同じだった。だからこそ。

「殺す」

互いを殺すことしか考えられなくなった二人を止めることなんて、真琴にはできなかった。

墮天使たちにもできなかった……止めたのは、やはり少女の声だった。

「ち、がうよ」

血の海に沈んだと思われたイリナが、フリードの足首を掴んでいた。

「……殺したと思っただけだな、ミスったか」

「違う、そうじゃないよ」

神を信じてない？見捨てた？違う、全く違う。

この二人は間違っている、とイリナは断じた。

「神様はね、試練を見てくれる、優しくて厳しい御方なの……リーダーが、あの子が、どうでもよかつたんじゃ、ないんだよ？」

「……………」

その言葉に、何かを言うわけでもなく。

只々無言でフリードは聖剣を振り上げた。

木場は重傷から立ち直ったばかりで間に合わない、真琴も瞬動で追い継ろうとするが、これも間に合わない。天閃の速度は光に迫るのだから。

「だから、そんなふうに、わらわないで？」

「——」

ガキンツと、金属音が響いた。

「…………チツ。ファイの奴、過保護かよ」

聖剣をウロボロスの魔法陣が止めていた。

一撃止めた後消えてしまったが、フリードが聖剣を再び振り上げることはしなかった。

イリナの意識は消失したのか、フリードを掴んでいた力は弱まっていた。

「おららよ」

「っわ!？」

ポーンつとイリナを投げ渡される真琴。

ついでだ、とゼノヴィアも蹴り渡された。

「目的は果たした、俺たちは帰るとするさ」

「待、」

「次だ」

スツと木場優奈を指さした。

「次会ったら殺してやるから、首洗って待ってろ」

「……こつちの、セリフだよ」

そうして、はぐれ神父はその場から立ち去った。

同時に一誠も降りてきた。

「悪い、逃げられた」

「ううん、こつちもだよ……逃がしちゃった」

聖剣は奪われ、仲間も幼馴染も重傷で、敵は健在。

明確に敗北しながらも、姉弟は微笑んだ。

——まだ、誰も死んでいない。

第11話 いざ決戦の地へ

——俺は何時も、遅すぎる。

○

「は、はあ?!?!だ、堕天使の幹部う?!」

深夜、真つ暗な学校にオカルト研究部と生徒会メンバーが集められた。他にも廃教会に住んでいる堕天使メンバーもいる。

保健室で怪我をしたイリナ、ゼノヴィア、そして木場にミッテルトを寝かせ、別の教室からもイスを運び出して来て各々楽な姿勢で一誠たちの報告を聞いていた。

「匙、少しうるさいですよ」

「で、でも会長!いきなりこんな、嘘だろ…?」

生徒会メンバーでも最近転生悪魔になったばかりの匙元士郎が慌てふためく。

しかたない、そもそも連休最終日になって、堕天使襲来のことを聞かされた上に、現状最悪ときたものだ。寧ろ動揺していない者など…二人と一体以外はいなかった。

「こうなった以上、こっちから仕掛けるしかありません。これ以上アイツらの思い道理にさせちゃいけない」

「そうそう、何するつもりだとしてもね」

「私はマスターたちにお供しますよ」

兵藤姉弟とその従者、レインだった。

「何を馬鹿なことを言ってるの!」

「そうです、そもそも相手がどこにいるのかすら……」

「場所なら分かっています」

「え!?!」

部長のリアスと会長のソーナ・シトリー二人の忠告をぶった切ってレインが取り出したのは、一枚の紙切れ……この駒王町の地図だ。

「彼らがやろうとしていることは、恐らく聖剣の統合です」

「聖剣の、統合ですって?」

「なんでそんなことがわかるのですか」

「分かったのはついさっきです……イリナとゼノヴィアから聞いた、重傷を負わされたエクソシストからの情報……それと、殺されたエクソシストの場所が、こちらになります」

地図にバツ印が書き足されていく。

「始め、殺されたエクソシストたちはどれも強者だから殺された、と聞かされました。加減が出来なかつたのだろう、と」

でもそれは違う。こうして地図で見ればわかることだが、殺された者はどれもこれもとある地点から一定の距離まで近づいて来た者なのだ。

「あのフリードという男は手加減なんてする人間ではありません。となると、重傷を負わされた者と殺された者には、もっと違う理由があるはずです」

「で、その理由つてのが、まあ簡単な推測ですけど」

「本拠地と、なによりも狙いに気付かれたから殺した」

「実力がある、イコール強いだけではない。それだけの知識、知恵を持ち得ており、情報収集能力にも長けている者のことを言うのだ。」

「……じゃあ何故重傷で済ませた者がいるのですか？」

「エクソシストを退ければ、それ以上の強者が釣れるからだよ、小猫ちゃん」

「そうして態々聖剣を持って来させた」

——「目的は果たした、俺たちは帰るとするさ」

「リーダー……フリードはそう言つて去りました。その手に聖剣を三つ携えながら」

「これで合計五本。残りは未だ見つからない一本と、未だ嚴重に保管されている一

本……流石に教会も最後の一本を持ち出してくるほど馬鹿じゃない」

「となると、現状の戦力であちらが集められる限界数だと考えられます」

聖剣エクスカリバーは歴代でも最強を謳われた絶大な力だ。

そんな力も今では七分割され、力は分割された以上に弱まった其れを統合するのは、教会勢力全ての悲願だ。

そして、はぐれ神父フリードは、そんな教会に一時期神父として潜りこんでいた。

神父から落ちたからこそはぐれの烙印を押された、そう認識を受けているが事実は違う。

「フリードは、殺し回ったって言った」

「優奈、まだ寝て居なさい」

「大丈夫です部長、大分楽になりましたから……アイツは、僕以上に独りで戦ってきたんだと思います」

地獄に落ち、聖剣の因子を覚醒させたからこそ神父にされたフリードは、陰ながらも暗殺を続けたのだろう。

「だとすると、逆に言えばこうなりますよね。奴は、誰よりも聖剣を知る機会があつた」

「木場優奈さんも同じ考えに至つたみたいですね……ここからは、皆さんが集まるまでの間に考察した、マスターたちと私の想像です」

フリードは聖剣を扱えるようになった。逆に言えば、それ以外は只の人間なのだ。アイツは力を欲している。悪魔を滅する力を、墮天使を屠る力を、神を殺せる力を。そうして、自然とたどり着いたのが手に入れた因子を使う方法。

○
とある場所にて。

フリードは描いた魔法陣の中心で、五つの聖剣を並べ統合する作業に集中していた。

「……皮肉だな」

コカビエルはそんな彼を見て、笑みすら浮かべず嘲笑った。

「地獄を壊すために、地獄に落ちた原因を使って力を得るなど。皮肉としか言いようがない」

「それでも、俺たちにはこれ以外方法がないんでさあ」

悪魔に出会ったわけじゃない、散々嫌いな奴らに利用されてきた。

特別が宿っていたわけじゃない、何処までも凡人だった。

そんなフリードが何もかもを超える力を手に入れる方法なんて、それくらいしかないのだ。

「それよりも旦那、ちゃんんと警戒してくださいませえよ？ 統合と同時に完成の衝撃で、此処

は聖なる光によって吹っ飛ぶでしょうけどね。きつと先にアイツらが来る」

「なぜ言い切れる?」

「色々言いすぎちまった……懐かしい顔を見たせいだなア」

口が滑ったとは正にこの事だ、と自嘲した。

今更、あいつらに何か求めてるんだろうか……。

「馬鹿か、んなもんもう」

とつくの昔に。

○

「俺と姉さん、レインで行きます。場所はこのバツ印の中心辺り……おそらく、地脈の源泉がある此処——駒王霊園」

「危険すぎるわ!」

「ええ許可できません」

「じゃあどうしろと? 戦ったから分かります。アレは禁手がないと殺せない」

幹部と呼ばれるだけあって、コカビエルの力は軽く手合わせした程度でもその強さを察することが出来た。

「俺の禁手は、単純に言えばひたすらパワーアップすることです。：切り札はまだありますけど、でもどう考えても、この霊園は吹っ飛びます」

「それは……私たちが足手まといだと、言いたいのかしら」

「そうです」

きつぱりと言いつ切る一誠に、リアスの怒気が魔力となって現れだした。

「優奈もだ。切り札、使う気がないんなら来んな」

「……」

一誠の勘だったが、木場優奈は既に至……至……している。

元々信者だった者が違法研究に陥り、最後は神への信仰を無くし、果てにその存在を完全否定、殺すことを誓った。

十分至るためのきつかけも実力も揃っている。

だが、其れを使う気がないことも一誠は把握していた。

「僕は、」

「遺品だから使わねえ。別に悪かねえよ……でもその枷があつて負けしかないってのは十分わかつただろ」

「……」

この数日、単独行動でフリードに一太刀も斬撃をまともにくらわせていない。

これが、只の魔剣創造を使っただけの木場優奈の実力だった。

「ですが、三人だけでどうするといふのですか？」

「そうよ。あちらも二人だけとは考えられないわ」

「それに、これだけだとコカビエルの目的が分かりませんわ」

フリードの状況は大体把握できたが、コカビエルについては分からない……わけでもなかった。

「多分、戦争だと思おうわ」

「貴女、たしか」

「レイナーレ……この学園、街では天野夕麻って名乗ってるわ」

墮天使幹部、総督に焦がれた彼女だからこそ、把握していることがあった。

「総督が神器に目が無いように、コカビエル様も目が無いものがあるの……それが、過去中斷された三大戦争よ。あのお方はずっと昔から総督とそのことで揉めている、つてよく噂話になってたわ」

「なるほど。魔王の妹がいるこの街で派手なことをすれば、魔王様が黙ってないわけか」
「相手の都合がどうあれ、どのみち時間はないのです。魔王様に連絡してもすぐ来れるわけじゃないんでしょう?」

「それは……」

リアス、ソーナともに現魔王の妹である。

だが、だからこそ彼女たち最優先に魔王が動くわけにもいかない。
来るのには相応の時間がかかるはずだ。

「今すぐ仕掛けないと、何が起こるか分かりません」

「でも、だからと言って私たちが何もしいわけにはいかないわ」

「……………」

一誠とリアスが睨み合う中、ソーナはジツと考えていた。

「……………では、こうするのはどうでしょうか。私たち生徒会が霊園に大規模結界を張ります。オカ研メンバーは赤龍帝一行と霊園に突入、強襲を掛ける。コカビエル、およびフリードを兵藤君たちに任せ、梅雨払いを残りのメンバーが行う」

「…まあ、その辺がベターですかね」

「いざとなったら、私たちも参戦するわ」

「その場合、盾役とかは任せられませんから。後ろで魔法撃ってもらえると助かります」

「まあ臨機応変で、ということでは……………行きましようか」

身支度を整えて出ていこうとすると、一誠たちを呼び止める声があった。

「まって…」

「イリナ？」

「どうしたの？」

「……………聖剣がないから、私はもう足手まといでしかないけど、お願い—リーダーを、殺さないで」

「ああ」

「まっかせて!」

その言葉に頷く姉弟たちとは違い、共に聖剣遣いとして働いてきたゼノヴィアは驚いていた。

例え神父であろうと、誰であろうと敵ならば斃す。それが教会の掟、だったはずなのに。

イリナはこの街に来て、この姉弟に会って変わった……否、思い出したのだ。

元の自分を、独りだった人たちを楽しい場所に連れていく、幸せが大好きな少女という本質を。

「……待て、私は行くぞ」

「え、でも」

「聖剣なら、まだある」

グニユンとゼノヴィアの横の空間が歪んだ。

そこから取り出されたのは、一本の大剣だった。

「聖剣デュランダル……私は因子を取り込んで覚醒したのではなく、生まれ持って聖剣を扱える者でな。此奴に選ばれてたりする、結構レアな存在なんだぞ?」

まあ赤龍帝には劣るかもしれないが、と苦笑いを浮かべた。

「ここまで来て両者ともに寝たきりなど、教会も赦さないだろう。是が非でも行かせてもらおう」

「へいへい、好きにしろよ」

こうして、一行は霊園へと赴くのだった。

第12話 戦闘開始

夜空に浮かぶ満月が、地上から伸びる光によって半分に割られていた。

その光柱の中心には、聖剣に囲まれたフリードが祈るように瞳を瞑り、意識を集中している。

この場所が霊園というのもあるのだろう、血塗れの神父なのにも拘らず神聖な雰囲気醸し出している。

「来たか、悪魔と龍の一派ども」

「……コカビエル」

彼らを阻むのは、割れた空に浮かぶ黒き翼を5対持つ墮天使、グリゴリ幹部コカビエル。

人々に占星術や星座について教えたという逸話を持ち、過去の大戦争を生き残った勇者だ。

「奴を止めに来たか。言っておくが止めたほうがいいぞ、悪魔どもは特にな」

「あの柱、聖なる光ね。私たちだと、近寄るだけで消し飛びかねないわ……」

「その通り。墮天使の俺でも少し寒気がするほどに、純粹無垢な光だ」

目を細めるようにして聖剣を統合しているフリードを見つめるコカビエル。

「さらに言えば地脈、龍脈と呼ばれる力の流れを使っているらしい。天体専門の俺には少し理解が及ばんが、エクスカリバー自体この惑星の力によって作られたようなものらしいからな。相性は抜群とのことだ：つまるところ、アレを手に行けるのは、因子を持った人間か：：聖光に耐えきれただけの力を持ったものとなるわけだが。：：出来そうなのはお前くらいだろうな、赤龍帝」

「ああそういうわけだから、とつとと始めようぜクソ天使！」

「私も忘れないでね！いつくよ一誠！」

一誠が左腕を、真琴が右腕を掲げた。

「赤龍帝の籠手!!!」

彼らの腕に、龍の紋章が入った紅き籠手が顕現する。

「……やはり、その女も赤龍帝の力をもっていたか」

「まあ私の場合は半分借りてるというか、なんとというか：：ドライグとかは一誠にしか宿ってないし、かといって偽物ではないんだけど……」

「姉ちゃん、態々説明してやることないって」

言い辛そうにする真琴を脅威として認めただろう、コカビエルの鋭い視線が二人を射抜く。

「流石に赤龍帝二体に加え、雑魚とはいえ悪魔どもの相手までするのは面倒だな」

そう言ったコカビエルの両隣に巨大な魔法陣が出現する。

その魔法陣から現れたのは……武具を着込んだ大量の人間だった。

「人……？」

「違うわ、靈魂よ」

「ああ此奴らは古の戦争においてどの勢力でも活躍していた連中だ。英雄、と呼ばれるのに一歩足りなかった連中だが、私に手傷を負わせるほどの猛者ばかりだ」

「殺した相手の御霊を、縛ったというわけですわね……」

「その巫女服、貴様は姫島の……悪魔に転生していた話は本当だったわけか。まあ俺には関係ないが」

何処か怨念でも籠ったような眼で睨み付ける朱乃を無視して、どんどん英雄未満戦士以上の猛者たちを召喚していく。

只でさえ実力的な面でも勝機は薄い。そんな連中を束に相手にしていたら日が暮れてしまう。

「おいおいおい、何体要るんだよ!!」

「一誠、一気に吹っ飛ばそ！」

「姉ちゃん……分かった」

フリードを止める前にコカビエルを止めなければこちらが削り殺されてしまう。

フリードを止めるためにコカビエルを倒すことが前提条件になってしまった、これでは相手のペースだ。

「一気に崩す!!」

「バランスブレイク!!」

『Welsh Dragon Balance Break!!!』

姉弟の声に合わせて、一誠の籠手からドライグの声が響いた。

一誠は全身に龍を模した赤い鎧を、真琴は所々肌が見える赤いドレスのような形の鎧……所謂ドレスアーマーと呼ばれる物を装着していた。その頭にはティアラも乗っている。

変化した二人は一気に飛翔し、靈魂どもを消し飛ばしながら会話をしだした。

「禁手の度に想うんだ、何か私の方えっちいよね。なんでかな? ドライグの趣味?」

「ドライグ、後でちよつと話があるんだが……」

『俺が知るわけないだろう!?!』

神器というのは持ち主の意思に影響をもたらされる。

すなわち、それは持ち主がそういう形の方がいいと望んだからなのだが……。

「籠手は一誠のだから、一誠の趣味?」

「え!? いや、いや、でもほらそっちの籠手は姉ちゃんのなんだから、姉ちゃんの趣味じゃねえかな?」

「んー?!」

姫様願望なんて持っていたのだろうかと首を捻る。

恐らく、一誠の姉に対するイメージと籠手本来の鎧としての禁手、それに加えて真琴の気質が合わさった結果だと考えられるが、今はそれどころではない。

「呑気な連中だな」

「つとー!」

一誠に向かって空から降ってきた光槍を弾き飛ばす。

結界に当たると、凄まじい衝撃波となって辺りに轟音を響かせた。

「アレで壊れないか。流石に魔王の妹たちだ、優秀だな」

流石に話しながら戦っている場合ではなかった。だが、邪魔な靈魂たちを吹き飛ばすのは二人にとっては作業でしかなく、無駄話もでるといふもの。

「姉ちゃん、アイツは俺がやるから」

「うん。私は部長たちと邪魔な奴らを片付けておくね」

「……怪我、しないでくれよな」

鎧を纏った手で姉の頭を撫でる。

それに頷くことで応えると、二人は各々の持ち場へと飛翔する。

「リアス先輩、墮天使は一誠に任せて、私と一緒に靈魂を蹴散らしましょう！指示を下さい！」

「……ええ、分かったわ」

基本真琴と一誠はツーマンセルで戦ってきた。独りでも戦ってきたが、団体戦はやったことがない。皆を纏めるリアスに指示を仰ぐのは、当然の帰結だった。

一瞬さつきまで赤龍帝二人の活躍に見惚れていたリアスは我に返ると、指示を出すために行動しだした。

「さあて、とつとと終わらせようぜクソ天使!!!」

「野蛮な龍が、よく咆える!!!」

地上では過去の亡霊と今を生きる悪魔たちが、空中では亡霊を操る天体の智謀者と赤き龍の力を持つ人間が、争いを開始した。

○

聖剣を纏め上げようとしていたフリードの意識は、深く深く沈み込んでいた。

——ここは……俺つちの中、か？

深層無意識ともいふべき場所だろう。所謂、心象風景がフリードを中心に展開されている。

意識の外では悪魔、堕天使、人間が争い合っているというのに、彼のそこは静かだった。

真つ赤な血溜まりが広がっている。辺りには人だった残骸が転がっている。

「……………」

自分が殺した連中だ、自分が壊した者だ、そして何より。

「俺、か」

沸き立つ血の中心に横たわっているのは、過去の自分だった。

薬に侵され、実験で砕かれ、人の意思によつて壊された自分だった者。ソイツから出る血は他の者を侵し、砕き、殺す。

——汝は何する者だ？

「ア？」

話しかけられた方を振り向く。

血溜まりから美女が浮かんでいた。

よく見ると、女の足元だけ血の色ではなく、透明……水のようなだった。

聖なる乙女……そんな陳腐な言葉が脳裏をよぎった。

——何を求め、私に干渉する。

「……………」

干渉、という言葉聞きさつきまで弄っていた聖剣を思い出す。

だが、此奴は違う。なぜなら、その聖剣は罅だらけの血塗れの状態で、自分の手の中にあるからだ。

「俺たちはこいつを使いたいだけだ」

—それは既に碎けている、折れている。人の身で直すことは叶わぬ。

「知るかヨ。これが必要なんだよ、この力が、絶対な最強つて奴が!!」

足りないというのなら持つてくるだけだ。

龍脈から、自分から、それでも足りないというのなら他所から奪つてくるだけだ。

—…造られた聖人よ。汝は血に塗れ、人の業に塗れたその剣で何をする…?

「ぶつ殺す。俺たち……この俺の正義の下に、ぶつ壊す」

—……。

乙女はフリードの背後、未だ形が遺る幼い死骸を見てから、フリードへ向き直った。

—いいでしょう、その剣、私が直しましょう。

フリードの持つ聖剣が、光り輝きだした。

—流れ込む力を、貴方を組み込んで、鍛え直してあげます。

「そいつはドローモ」

—但し……一つだけ、誓いをお願いします。

スツと足音も水音も無くフリードへと顔を近寄らせた。

上目遣いで見つめる長髪の乙女は、瞳を哀しげに潤ませて言った。

「どうか、貴方の本当の正義を見つけてくださいね」

どういうわけか、さつきまで脳裏に浮かび上がるような声は、ハッキリフリードの耳に聞こえ取ることが出来た。

「私は、あなたの行方に賭けましょう」

思わず口元が笑みに歪んだ。

こんな乙女に賭け事をさせるなんて、随分罪な男になったもんだな、なんてふざけた思考が過る。

「私は、貴方を見守りましょう——あなたに、聖なる加護があらんことを」

光り輝く聖剣に力が宿り、辺りの血溜まりが吸い上げられていく。

その全てが干上がる頃、フリードの意識が戻った。

○
「――」

光の中心に自分がいることを認識する。

戻ってきた、と確信して聖剣を見る。

「……ハ、ハハハハハハハ」

空笑いが口から洩れた。

本来なら強引な龍脈の使用によって余波が起こり、霊園ごと辺りが吹き飛ばはずだった。

それを、その流れを全て収めた者がいる。

自分ではない誰かが、何者かが――あの乙女が、やってくれたのだろう。

「ハー……随分、俺つちに似合いの姿になっちまったなあ」

血の紅色に聖剣が染まっていた。

聖なる力は纏めただけとは思えないほどに膨れ上がっている。

これはもう、聖剣と呼べるのだろうか。聖なる力を持っている禍々しい剣を見て、フリードは思わず苦笑を浮かべる。

「ハハ、今日はよく笑える日だなあ――ン？」

聖剣を持つ手を見て、ふと気づいた。

紅い紋様がその手に浮かんでいる。否、両腕に広がって、恐らく全身に模様が描かれていた。

——流れ込む力を、貴方を組み込んで——

そう言っていたあの乙女を思い出した。

成るほど、と納得すると同時に力の行使の知識が脳裏に浮かんだ。

龍脈、聖力、其れを組み込まれた自分という存在を理解した。

「……力試しと行きますか」

光柱が納まってこちらを見つめる堕天使、悪魔、人間、龍たちへとフリードは歩を進めた。

——さあ、聖剣による伝説を紡ぎだそう。他の誰でもない、己が手で。

第13話 意思と力と：？

駒王学園、保健室。

そこでは着替えて戦場へ赴こうとしている人物がいた。

「行くの？」

「……うん」

「そ、つか。使うの？」

「………」

木場優奈は一流の剣士だ。

だが、それ故に今現在自分に足りないものがよくわかっていた。

強い剣？力？——違う。

「……ボク、は」

それは、意思だ。

ただ戦うのではなく、己を戒めて剣を振るうのでもない。

何をしてでも敵を斬り裂く意思。それが、今剣士として木場優奈に足りないものだ。

——「戦場に立ったら悪も善もありません、ただ斬るのみです」

剣士としての師匠の言葉を、思い出した。

善も、悪も、聖も、魔も関係ない。勿論、今も昔もだ。戦場を駆け抜けるのなら、斬り抜けるのなら、その剣に似合う鋼の意思が必要だ。

だが、木場優奈にはその一步が踏み出せないでいた。

過去の友人たちから受けとった遺志は分かっている、ここで木場優奈が折れることを彼らは否定しないだろうが、認めもしないだろう。

自分達のことは気にしないで、戦つてと、きつというはずだ。だって、そうして生き延びさせてもらったのだから、今更確認することでもなかった。

これは我儘だ。貰った物を出るだけ綺麗にしておきたい、なんて言う木場優奈の悪魔らしくない潔癖な人の心が叫ぶ我儘。

そして、それすらただの方便という、自分への甘さが原因だ。

「ボクは…私ほね、イリナちゃん」

イリナは優奈が少し、雰囲気柔らかくなったのを感じた。

騎士らしい毅然とした姿勢なんてまるでない、片腕を抑えて震えるその姿は只の怯えている少女の様だった。

—怯えている？なにに？

その疑問を、優奈はすぐ解消してくれた。

「争いって、嫌いなんだ」

「え…?」

イリナは優奈のことをよく知らない。だが、彼女が今の今まで独断行動していたという事実は聴いていた。よりによって相性最悪であろう聖剣を持ったフリード相手に、ずっと一人で特攻してきた彼女が、戦闘行為を否定したことにイリナは驚いた。

「痛い嫌い、辛い嫌い、苦しい嫌い…真つ赤な血を見ることがイヤ」

「じゃあ、なんで戦うの?」

「それは…」

思いつくのは、皆の最後。

毒によって苦しみ、血を吐き散らしながら死に絶える皆の姿。

そんな中皆が因子を渡してくれたおかげで聖魔剣に覚醒してしまい、傍観することし
かできなかった自分。

生かされた、残された、助けられた。

でも、だけでも彼女は救われなかった。仲間も死に絶え、覚醒した神器に護られ死な
なかった。

そんな彼女を見て喜ぶ研究者たちを顕現した剣で殺しつくした…。

「私は、皆にせめて君だけでも生きてって助けられられて、でもね…あの時、

私も死んだんだよ」

肉体カラダではない、精神ココロが死んだのだ。

死に逝く仲間たちと共に、木場優奈だった少女の大事なモノまで崩れ消えた。

「痛いのも辛いのも苦しいのも嫌い。血を見るのは、仲間を思い出しちゃうからもつとイヤ。そんなものから連想してしまう自分が大嫌い……：なにより、自分だけが生きていることが一番……」

キバユウナは優しかった。だから、木場優奈今の彼女は日々こう思っていたのだ。

「私は死にたい。でも貰った命を無駄には出来ない、ただで死ねない。ホントは神なんてどうでもいい、誰かの役に立って何処かを死に場所にして死にたいの」

そして、そんな誰かが、そんな何処かが出来てしまった。

拾ってくれた優しい悪魔、暖かな仲間達、この部室がそして今という時が、優奈にとつての誰かで場所になった。

だから痛くても辛くても苦しくても、嫌だろうが憎らしかろうが彼女は戦うのだ。

死んで殺して自由になった彼女には、それしかできないから、それしか知らないから。「だから、私は死ぬまで皆の為に戦い続けるの。皆の為っていう、自分のために」

「……………」

結局はエゴなんだと自傷し自嘲する優奈を見て、その断片を知って、イリナは少し悲

しげな瞳のまま、笑いかけた。

「そっか、優奈さんのことは分かったよ、少しだけ……でも残念だったね？」

彼女のことは悲しい。自分には何もしてあげられないだろう無力さが悔しかった。

でも、イリナは知っている。彼らを知っている、だから笑った。

「貴女の願いは叶わないよ……イツセーくんや真琴ちゃんが一緒なんだから」

優しい彼らは、自分が知らない間に遅しくなっていた。

教会の中でも結構な実力を持ったと思っていたのに、それを粉々に打ち砕かれてしま
うくらいに。

「私の幼馴染はね、皆優しいし、強いんだよ。私よりずっとね。だから——」

震える優奈の手を取り、イリナはそのまま優奈を抱きしめた。

「そんなに怖がらないでいいよ。大丈夫、あの人たちは、貴女を死なせない」

「……………まいったな」

自分のために皆の為に戦い、死ぬ。それが出来れば本望だということに変わりはない。戦いの結果誰よりも早く死んだとしても、それもいい。

でも、やっぱり、死というのは恐怖の対象だった。人の死の瞬間を目の当りにしたら、

尚の事。

「ほら、分かっただらさっさと行って、暴れて来て。私の分までね」

「うん。僕自身、フリードの奴と決着つけたいし、存分にぶつけてくるよ」

黒と白、相反する聖魔の融合した剣を片手に造りだすと、優奈は学園から高速で駆けて行った。

「んー、決着つけたいってあたり何だかんだ勝負事は好きそうだよねえ…：多分ギャンブラー気質なんだろうなあ」

まるで仲良しの友達の所へ遊びに行く妹を見送るような気分でイリナは見届けた。

○

一方、結界を保持している生徒会側は大慌てしていた。

「ちよちよちよつとタンマタンマタンマアアア!!!」

「匙、落ち着きなさい」

「いやいや、会長でもこれはっ!!」

赤龍帝、墮天使幹部、紅い聖剣。

正直に言って生徒会全員の力を余裕でキャパオーバーしていた。

匙の持つ神器、黒い龍脈アフション・ラインを結界の機能に差し込むことよって、結界の中に満ちる

力を吸収、それを結界に流し込んで無理やり補強というかなり強引なことで場を持たせていた。

だが、匙は転生悪魔であり、紅い聖剣の力まで吸い取りかねないというかなり危険な状況でもある。

「赤龍帝の力を取り込んでいるおかげですね、匙の龍の力が増大しているようで助かります」

「オレは何時自分が血だらけになるんじゃないかって恐々としてますよ……」

言いながらも中の力はどんどん増大していく。

結界を壊されない様に他にも工夫はしているのだが、如何せんこのままだと一時間しないうちに結界が壊れてしまう。

「つってもこれ以上どうしたら……ん？」

「匙、集中しなさい」

「いや、会長………あれって」

キラツと何か光った気がした匙は、増大した力によって更に良くなった夜目を駆使してある人物を目撃していた。

「………木場さんじゃ？」

「はい？」

大きめの剣を足場にしてサーファアのように夜空を一直線に突き進むその姿は、まぎれもない木場優奈だった。

空を駆ける魔剣を造り出したのだろうが、このままだと結界に当たってしまう。

そして、今の結界は諸事情によって出入りができない状態だった。

「木場さーん、今は入れないからちよつと」

「ダメです、避けなさい！」

「へ??」

首根っこ引つ掴まれた匙は会長と一緒にその場を離脱、他の会員も物陰に隠れたと同時の出来事だった。

「——ただ、斬るのみ——!!」

物陰から見た光景を、一行は忘れないだろう。

人が折角頑張って持たせていた超強固な魔壁を、一刀の剣が真つ二つにしてしまった。

「む、無茶苦茶だ」

普通なら壁に当たり、見せられないよ！な状態になるだろうに、彼女は力技で捻じ伏せてしまった。

「匙、急いで結界の張り直しです！ああもうどうしてリアスの眷属はこうも規格外なのですか…！」

勿論その規格外っぷりが能力だけでないことは、明らかだった。

○

木場優奈が結界に押し入る数分前、オカ研はピンチに陥っていた。

数に圧されただけではない。コカビエルと一誠に向かつてフリードが振り下ろした聖剣により、結界内が真つ二つに割れたせいで、場の混沌具合が増したからだ。

「リアス、割れた校舎から回り込んできていますわ!」

「ヤバいわね」

魔力で強化した校舎を背にして戦うことで、360度ではなく180度面で戦っていたのだが、これでは一枚の大きな盾を失ったも同然な上に全方位で戦わざるを得なくなった。

どうにか持たせているが、真琴ではもうカバーしきれなくなっていた。

「皆!!」

「おーつとどこ行くんだイツセー?」

「懐かしい呼び方をどうも。でも今は邪魔だ!」

フリードに向けて拳を振るう一誠。

軽く避けていくが、一誠の背後から迫る巨槍を見て聖剣を振り下ろした。

巨槍と聖剣から発生した聖気の斬撃が衝突し、消滅した。

「どういう心算だフリード。何故俺にまで攻撃を」

「元々こういう心算だったつーだけでさ旦那。俺つちにとつては悪魔も墮天使も天使も神も魔王だつて敵だからナ。……今なら通用するだろ?」

「チツ」

こうなることは想定していたことだが、フリードの強化が想定外だった。

睨み合う二人を放置し、巨槍と斬撃を避け目くらましに使った一誠は真琴の下へと到着していた。

「一誠、今のままじゃもう」

「……無理かなあ?」

「うん、多分無理」

「だよなあ」

諸事情により、人外に片足突っ込んでいる二人だが、ベースは未だ人間。

だからこそ、禁手を使っても限界というモノがあった。

戦いながら話し合いが続く。

「でもアレは」

「愚痴つても仕方ないと思うよー」

「うぐ…」

話し合いというよりも、真琴が一誠に説得しているような状態だった。

禁手である赤龍帝の鎧……二人には、更にもう一枚手段が用意してあったのだが、一誠には洩る理由があった。

それは……。

「このままじゃ皆死んじゃうよ」

「……わーたよ。あーもう、コレ嫌、ってわけじゃないんだけどああああああちくしょー!!」

『相棒、腹を決めろ』

「分かってるつつーの!!!いくぞドライグ、姉ちゃん!!」

「はいはい」

『Welsh Dragon Balance Break Reverse!!!』

ドライグの声が響いたと同時に、真琴と一誠の体が翡翠色に光りだす。

巨大な龍の氣の竜巻となり、邪魔立てすることが出来なくなった状態で……二人の姿が重なった。

「——エ?」

「——は?」

「……」

部員の皆から、フリードからおかしな声が漏れ、コカビエルは只々見ていた。

二人が一人になる瞬間を。

ウエルシュ・リバー・スマイル
「反転セシ赤龍帝……」

そう眩いたのは、竜巻の中にいる一人の少女。

一誠のような特徴的な髪癖だが、優奈のような栗色の長髪。

両者ともにそうだった、翡翠色の瞳。

一誠と優奈の間の、少し低めの背丈。

心なしか優奈より少し大きめの胸。

その背には赤い龍の翼を生やし、両腕には肘まで覆う程度に長く、そして少し大きく
ごつくなくなった籠手。

その身に纏うのは、胸部を少し露出し脚には動きやすいように切れ込みが入った、
所々半透明のドレス。

ドレスの上には、赤い龍を模したのであろう簡易な鎧が装着されていた。

「……ツプ、ギャハハハハハアハハハハ!!!ナ、なんだ、ソリヤ?!?」

「うっせえ、俺に言うな!てえか笑ってんじやねえクソリーダァー!!!」

「中身は一誠なのね」

「正確には主導権を握ってんのが俺です!……俺の神器なので」

ああなるほどと全員が納得する。

「部員の皆の反応が日頃とあまり変わらなくて嬉しいような悲しいようなっていか小
猫ちゃん気にするところそこなの!？」

本人も荒ぶっていた。

そして、そんな場所に文字通り斬り込んできた者が一人。

「斬るのみ——…って、何この状況？」

「うわああああああああああ!!!」

目撃者が増えたことに、一誠(♀)が全力で泣いた。